



# 踊れ、魂よ！

—風流踊の楽しみ方—



2023年6月24日開催シンポジウム  
「踊れ、魂よ！—風流踊の楽しみ方」記録集  
於：東京国立博物館平成館大講堂

共催：公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団  
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所

特別協力：西馬音内盆踊保存会

## 緒言

本報告書は2023年6月24日（土）に東京国立博物館 平成館大講堂で行なったシンポジウム「踊れ、魂よ！—風流踊の楽しみ方—」の記録である。

日時：2023年6月24日（土）

場所：東京国立博物館 平成館大講堂

共催：公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所

### 【プログラム】

開会挨拶

第一部

講演 風流踊の楽しみ方

1. 歴史編（久保田裕道）
2. 音楽編（川崎瑞穂）
3. 装い編（俵木悟）
4. 関西地方の事例（森本仙介）

クロストーク

第二部

ご挨拶（安藤豊 羽後町町長）

映画上映「端縫いのゆめ—西馬音内盆踊り」

実演と解説（西馬音内盆踊保存会×久保田裕道）

閉会挨拶

交流会



## 序にかえて

みなさん、こんにちは。ポーラ伝統文化振興財団の小西でございます。本日は「踊れ、魂よ！—風流踊の楽しみ方—」にお越しくださいませ誠にありがとうございます。

風流踊は昨年11月にユネスコ無形文化遺産に登録されましたけれども、本日はその風流踊について、民俗芸能の研究をしていらっしゃる4名の先生方からお話を伺いましたあと、弊財団制作の記録映画『端縫いのゆめ—西馬音内盆踊り—』を上映し、それから西馬音内盆踊保存会のみなさまによる実演と、様々な角度から風流をお伝えして参りたいと思います。どうぞ最後までお楽しみいただければと思います。

私どもポーラ伝統文化振興財団は、化粧品会社としてご存知かもしれませんが、ポーラ・オルビスホールディングスの支援を受けまして1979年に創立いたしました。その後、44年に渡り、日本の無形の伝統文化振興のために様々な活動を行っております。そのひとつに、貴重な日本の伝統文化を後世に残すための記録映画の作成という取り組みがございまして、これまでに50本の映画を製作しております。

このたび、東京文化財研究所様と連携し、こうした貴重な伝統文化の保存・振興活動をさらに活性化させていくために、弊財団の記録映像の一部を研究所様に寄贈させていただきました。弊社の記録映画につきましては、これまでは本日のような上映会、またはDVDの貸し出しなどを通じてご覧いただいておりますが、これを機に、研究所内の資料閲覧室での閲覧も可能となりましたので、研究活用や一般視聴など、みなさま方にはぜひ幅広くご活用いただければと思っております。

本日はその記録映画の中から、1984年に製作いたしました『端縫いのゆめ』をご覧いただきます。実は昨年、その映画から40年後の現在の西馬音内盆踊の継承の様子を記録した新しい映像「踊れ、魂よ—精霊たちと交わる夜—」を製作いたしました。40年という時をこえても変わらない、西馬音内のみなさまの盆踊にかける熱い思い、そして代々受け継がれてこられた伝統を守り抜く方たちの姿を記録した、とても貴重な映像となっております。こちらは本日は上映いたしません、お手元の資料のバーコードを読み込んでいただきますとご覧いただくことができます。YouTubeでも配信しておりますので、ご覧いただければと思います。

それでは本日ご来場いただきましたみなさま、遠路秋田よりお越しくださいました西馬音内盆踊保存会のみなさま、羽後町長の安藤豊さま、そして共催となります東京文化財研究所のみなさま、そのほか関係者の方々に心より御礼申し上げまして、簡単ではありますが、私の挨拶に代えさせていただきます。



映像「踊れ、魂よ—  
精霊たちと交わる夜—」

公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団理事長 小西尚子  
（「踊れ、魂よ！—風流踊の楽しみ方—」開会挨拶より）

## 目次

緒言		i
序にかえて	小西尚子（公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団理事長）	ii
<b>講演 風流踊の楽しみ方</b>		<b>1</b>
1. 歴史編	久保田裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部）	1
2. 音楽編	川崎瑞穂（聖心女子大学非常勤講師）	13
3. 装い編	俵木悟（成城大学 文芸学部）	21
4. 関西地方の事例	森本仙介（奈良県文化財保存課）	31
<b>クロストーク</b>		<b>41</b>
	久保田裕道×川崎瑞穂×俵木悟×森本仙介	
<b>実演・解説 西馬音内盆踊り（秋田県羽後町）</b>		<b>43</b>
	解説：佐藤幾子（西馬音内盆踊保存会）×久保田裕道	
<b>おわりに</b>	友田正彦（東京文化財研究所 副所長）	49
	資料：ポーラ伝統文化振興財団寄贈 伝統文化記録映画一覧ほか	50



## 1. 歴史編

久保田 裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

### 1. 風流踊とはなにか

東京文化財研究所 無形文化遺産部で無形民俗文化財研究室長を務めております久保田裕道と申します。どうぞよろしくお願いたします。

昨年 2022 年に風流踊がユネスコの無形文化遺産になりまして話題となりました。でも「風流踊って何だろう」ということは、なかなかわかりづらい、難しい問題かとも思います。今日はそんな風流踊について、いろいろな方面からお話をさせていただいて、少しでも風流踊がどんなものか、わかっていただければと思います。その上で、その楽しみ方に注目していただければ幸いです。私は「歴史編」ということで歴史のお話なのですが、こちらの写真は今年（2023年）5月3日にあった滋賀のケンケト祭り、ちょうどユネスコ記念ということでこんなセレモニーをしておりました（図1）。

そんなわけで、風流踊とは何かということをお話するのですが、まず「フリュウ」という言葉について。みなさん、「風流」という言葉をご承知かと思えます。フリュウとフウリュウとどう違うのかと言いますと、基本的には一緒だと考えていただければよいです。辞書を引きますと、フリュウの第一義が「ふうりゅうに同じ」ということで、フウリュウの「上品で優美な趣のあること」という説明になっており（図2）、2番目には「祭礼の行列などで、服装や笠に施す華やかな装飾」となっています。言ってみれば、「フウリュウだね」という時の趣のある「風流」に対して、非常に賑やかで派手なというような「風流」もあるんですね。芸能に関わるもの、これをとりあえずフリュウと読んで、賑やかな方を指すと思っていただければ



図1 ユネスコ無形文化遺産 登録記念セレモニー  
近江のケンケト祭り（2023年5月3日）

#### 【風流 ふりゅう】

- ①上品で優美な趣のあること  
\*『万葉集』（8C）
- ②祭礼の行列などで、服装や笠に施す華やかな装飾 \*『百練抄』（1154）
- ③芸能の一種。（イ）華麗な仮装をし、囃し物を伴って群舞した、中世の民間芸能。またその囃し物。後には、趣向をこらした山車などや、それを取り巻いて踊ることをもいった。\*春のみやまち（1280）

図2 「風流」の辞典的説明

#### 「風流」の分類

- イ. 念仏踊 ロ. 盆踊 ハ. 太鼓踊  
ニ. 鞆鼓獅子舞 ホ. 小歌踊 ヘ. 綾踊  
ト. つくりもの風流 チ. 仮装風流  
リ. 練り風流  
ヌ. アイヌの舞踊 ル. 沖縄の舞踊

図3 本田安次の「風流」分類（『日本の民俗芸能』）





図4 下伊那のかけ踊り〔和合の念仏踊り〕  
(長野県阿南町)



図5 円座町のかんこ踊り (三重県伊勢市)



図6 下九沢の獅子舞 (神奈川県相模原市)



図7 行山流舞川鹿子躍 (岩手県一関市)

よいかと思います。

その風流ふうりゅうのつく踊り、風流踊にどのようなものがあるのかということですが、日本の民俗芸能研究の草分けである本田安次(1906-2001)という先生がいらっしゃいました。この方が風流踊をいくつか分類して説明をしています。図3にざっと挙げてあるようなものですが、最後の「アイヌの舞踊」「沖縄の舞踊」は、同じ本田先生の分類でも含めていない場合もありますのでとりあえず外して、資料の「イ」～「リ」と考えてみたいと思います。つまり風流踊と一口に言っても、いろいろな芸能が含まれているということです。これをひとつひとつ説明すると時間がすぐなくなってしまうので、主なものだけ少しご紹介したいと思います。

まず、念仏踊・踊念仏です。これは文字通り、念仏を唱えるということと踊りが合体したような芸能です。図4は長野県阿南町の山の中で行われている「和合の念仏踊り」というものです。こうして太鼓を叩いていますが、この後、念仏を唱える時には踊りを止めて静かな形になり、太鼓を叩きながら念仏を唱えるという形になります。

それから図5は三重県伊勢市のカンコ踊りという太鼓踊です。これは日本だろうかと思うような不思議な格好をしていますね。これは2022年のお盆に行ってきました。このような異様な格好をしていますけれども、注目すべきはこの太鼓です。太鼓をお腹の前につけて、これを叩きながら踊るといふ形の、こういった太鼓踊がたくさんございます。

この太鼓踊は西日本に多いのですが、東日本に行くと獅子の頭をかぶった「鞆鼓獅子舞かっこ」、俗に「三匹獅子舞」などと言われるものがたくさん伝承されており、これも太鼓踊の変形バージョンと考えてよいのではないかと思います。なぜかこの三匹獅子舞は、基本的に東日本にしかないものです。図6は神奈川県相模原市で伝承されている三匹獅子舞です。先頭に鬼みたいな面をつけた人がいますが、後ろの三人が獅子です。ちなみに、私の家の近所の大田区大森の「水止舞みずどめ」という三匹獅子舞が、まも



なく7月9日(2023年)に行われます。今年は、始まってから700年という記念の年だそうで、700年が本当かどうかは別にしましても、お近くの方はぜひ見に行ってくださいと思います。

それから、同じ鞆鼓獅子舞が、もうちょっと北の方にまいますと鹿に変わるんですね。図7は岩手県のシシ踊で、これも鞆鼓獅子舞の一種だと思ってよいと思います。こちらは一関市の舞川鹿子躍まいかわししおどりで、今日は伝承者の方もいらっしゃっていますけれども、獅子が鹿に変わった例です。それから背中に長いものを背負っている、こういった飾りをつけるというのも風流踊のひとつの特徴と言ってもよいかもしれません。

それから小歌踊こうたです。これは風流踊の古い形です。一口に風流踊といっても、広い意味での風流踊と、狭い意味での歴史的な風流踊と分けて使ったりするのですが、小歌踊は古い、歴史的な部分を背負った風流踊です。図8は新潟県の綾子舞です。この演目ではコキリコというものを持って舞っているので、コキリコ踊と言います。いくつもの踊りがここで演じられます。ちなみに踊りだけではなく狂言も行われまして、図9は狂言の「海老すくい」です。いまNHK大河ドラマ「どうする家康」でよく踊られている「海老すくい」ですが、踊りはもう絶えていてよくわからないのですが、あれが取り入れられた狂言と言ってもよいかもしれません。同じく小歌踊は都内にもありまして、図10は奥多摩で行われている鹿島踊かしまです。女性の恰好をしておりますが全員男性で、真っ白な顔で踊っています。

それから綾踊あやは本来、綾棒と呼ばれるものを持って踊ります。先ほどのコキリコみたいな棒もそうですが、この持ち物がいろいろ変わりました、武具としての棒術の棒に変わった例がこちらです(図11)。これは高知県香南市の「山北棒踊りやまきた」というものです。棒を持って、この後、2人で組んで戦うような場面もあったりするのですが、集団でこういった舞踊も行っています。



図8 綾子舞（新潟県柏崎市）



図9 綾子舞の狂言「海老すくい」（新潟県柏崎市）



図10 小河内の鹿島踊（東京都奥多摩町）



図11 山北棒踊り（高知県香南市）

- ① 踊念仏：平安時代に空也が始めたことされ、鎌倉時代に一遍が広めた（『一遍上人絵伝』1299）。念仏や和讃を唱えながら、唱える人自身が踊るもの。
- ② 念仏踊：菅原道真（9C）や法然（13C）の伝説が残るが、発生は不明。「踊念仏」との差異点として、踊り手と歌い手が分かれるとされる。15C頃から「風流」的な念仏踊が登場した記録が見られる。

図 12 風流踊の原型・念仏踊と踊念仏



図 13 睦月神事（福井県福井市）

- ① 『経覚私要鈔』（1415-1472）  
盆の風流踊  
（つくりものと劇的要素を兼ねそなえたもの）  
  
文安 4（1447）風流為之、猿樂也、  
風流天岩戸ノ事也  
長祿 2（1458）先有笠、次鷺二人舞之、次延年…  
文明 1（1469）異類異形にて終日おどろおわんぬ。  
二三千人もこれあるべし…
- ② 『春日社司祐維記』（1521）  
傘鉾3本、小袖を腰巻とした踊り衆による  
「薩摩踊」「西行桜」「新発意太鼓」「五位鷺」など
- ③ 『豊国祭礼図屏風』（1604）  
豊臣秀吉七回忌

図 14 盆の風流

江戸初期にお国という女性が演じた  
かぶき踊りが京都で流行  
→女性芸能者による女歌舞伎が江戸・大坂でも流行  
→禁令が出され少年による若衆歌舞伎が流行  
→禁令が出され成人男性による野郎歌舞伎へ  
舞踊から演劇へ

図 15 かぶき踊り

## 2. 風流踊の発生

ざっと大まかにいろいろなバリエーションを見ていただきましたけれども、次に、そもそも風流踊はどうやって生まれたのだろうかということです。

風流踊の原型のひとつには、**念仏踊**あるいは**踊念仏**というものがあると考えられています。踊念仏というのは平安時代に空也が始め、鎌倉時代に一遍上人が広めたと伝えられるもので、念仏を唱えながら、唱える人自身が踊るものです。それに対して、念仏踊というのは、先ほども写真をお見せしましたが、踊る人と念仏を唱える人が別だったりする。これは現在でも、特に盆の芸能などはこの念仏踊系のものが非常にたくさんあります。歴史的なものは絵画資料を使えば非常にわかりやすいのですが、いろいろ大人の事情で使えないところがありますので割愛します。踊念仏は、数は少ないのですが、今でもこのような形でやっているところが日本各地に何ヶ所かあります。

それからもうひとつ、**田楽風流**もあります。田楽というのは豊作を願う芸能ですけれども、その中にも風流的な要素がみられ、今でも民俗芸能としてそうした形が残っているものもあります（図 13）。

それから歴史的な資料を見てまいりますと、**お盆に風流踊を踊る**という記録がたくさん見られます。図 14 の①は『経覚私要鈔』（1415-1472）という中世の奈良・興福寺のお坊さんが書いた記録ですが、それを見ると文安 4 年（1447）に「風流為之（風流を行った）…風流天岩戸ノ事也」などとありますし、長祿 2 年（1458）には「鷺二人舞」をやったりしています。

文明元年（1469）の年には、あまり盛り上がりすぎたので奈良で風流踊をやってはいかんという禁令が出まして、それで別の場所でやったところ、異類異形の形をした、つまり仮装をした人たちが 2000～3000 人も来て盛り上がった、みたいな記録があるのです。今で言えばハロウィンの時の渋谷駅前みたいな感じだと思うのですが、そんな形で盛り上がっていた芸能ではないかと思います。ちなみにこ



の時期、「林間（淋汗）風呂」という記述も見られます。これはサウナのことで、当時のお風呂は基本的にサウナですので、サウナに人々が集まって、そこでちょっと飲み食いをする中に、いわゆる茶道としてのお茶もあつたりしました。そうやって茶道のお茶は、当時は一種の風流として行っていたということがわかります。そこに村田珠光などが来ていて、だんだんとわびさびの茶道に繋がっていくことになります。それから同じくお盆の風流として、これは春日大社の方が書かれた『春日社司祐維記』（1521）という記録ですが、傘鉾3本が出てくる、そういった記録が残っております（図14-②）。それから有名なのは『豊国神社祭礼図屏風』（1604）です（図14-③）。豊臣秀吉の七回忌に行われた祭りで、踊りを賑やかに踊っております。この屏風絵を見ますと、大きな傘が描かれています。この傘は、風流踊の大きな特徴と言ってよいかと思えます。

そしてそういったものがだんだんと**かぶき踊**となっていく。この辺りは有名なのでご存知かと思いますが、出雲の<sup>おくに</sup>阿国という人が出てきます（図15）。最初は女性が踊りとして行っていた歌舞伎がだんだんと演劇化して、そして男性が行っていくようになる。こういった歌舞伎の歴史があります。ですから、歌舞伎の源流が風流踊だと言ってもよいわけです。

### 3. 風流踊の展開

さていよいよ時間がなくなってきましたので展開の部分をお話しします。古い時代、この風流踊のひとつの原型として「風流囃子物」というものがありました（図16）。これも今までお話してきたような感じですが、特徴として、大きな傘を持っているということや、仮装するなどということが共通点として挙げられます。図17は現在行われている芸能ですが、鬼の後ろに大きな傘がいます。それから図18は盆踊ですが、現在でもこうやって仮装しています。今風な仮装ですが、こういった伝統が今も続いていると言えるのではないかと思います。

また形式について詳しく説明する時間がないのですが、真ん中で傘や仮装の人たちが「中踊」といって踊って、その周りで揃いの衣装を着た人たちが「側踊」を踊る、こういった歴史的な共通様式が見られる風流踊もあります。

さてもうひとつ、風流踊とは何のために踊られるのかということですが、例えば京都の「やすらい花」という行事は、桜の花が散るといろいろと悪いことが起きるといって、花が散らないようにと願って踊るものです。それから図19は5月に見てまいりました滋賀のケンケト祭りですが、これも

#### 風流囃子物とは

- ① 傘鉾・風流傘（装飾的な長柄の大傘）や人形などの造り物や仮装を伴って、太鼓・鞆鼓・笛・摺鉦・鼈などで囃し踊る芸能である。（福原 2023）
- ② 輪の中で踊る仮装の者や囃子方を中踊り、周囲を取り囲む揃いの趣向の踊り手を側踊りと呼ぶのが一般的…（山路 2023）

図16 風流囃子物とは



図17 推出鬼の舞（和歌山県九度山町）



図18 一日市盆踊り（秋田県八郎潟町）





図 19 近江のケンケト祭り長刀振り

いろいろな意味がありますが、ひとつには、この鷲のつくりものに悪霊たちを集めて追い出すということです。それから図 20 は香川県まんのう町の綾子踊という踊りで、こちらもいろいろな意味が語られていますが、雨が降るよという雨乞の踊りの側面があったりします。



図 20 綾子踊（香川県まんのう町） 祈雨などの口上の後に、女装した男児の子踊、鉦や太鼓を奏する大踊など小歌に合せた踊りが演じられる。

#### 図 21 風流踊りの意義

- ・ 新島の大踊（東京都） 踊りの所作や風流傘など、中世に流行した風流踊の遺風が認められる
- ・ 毛馬内の盆踊（秋田県） 祖先供養の盆踊に娯楽的要素の踊りが加わって今日の姿に至るまでの変遷の過程を示し、また地域的特色も顕著である

文化庁『「風流踊」のユネスコ無形文化遺産への提案について』 報道発表資料別紙より（2020年3月）



図 22 山北のお峰入り（神奈川県山北町） 名称から修験道の入峰儀礼的要素が窺えるが、実際には修行踊り以外に見られない。奴踊りや棒踊りなど風流踊的な要素が強い。



#### 4. 風流の多様性

さて最後に、風流踊のこれからのことも含めて、風流踊の多様性ということですが、風流踊はそもそも文化財として指定され、そしてユネスコ無形文化遺産になったわけですが、文化財として見た場合の意味もいろいろあります。図 21 は文化庁が発表した文章ですが、上の方では「中世に流行した風流踊の遺風」が残っている、古いから貴重なんだという言い方をしています。しかし下の方では、「変遷の過程を示し、また地域的特色も顕著」とある。だから変わってもいいということなんですね。歴史の中で展開して変わってきたものが残っているということそのものが重要なんだと言えるかと思います。ですから例えば神奈川県山北町で行われている「山北のお峰入り」という芸能は、いろいろなものが組み合わせられて行われている（図 22）。山伏の修験道的な儀礼があったり、大名行列のようなものも行われていたり、このように様々なものが集まって行われている風流踊もあります。「山北のお峰入り」は5～6年に一度しかやらないのですが、今年（2023年）は幸いにして10月8日に開催する予定ですので、よろしければぜひご覧いただければと思います。

それから主に都市部で始まった風流踊ですが、これが地方にもたくさん広まっています。しかし、どこの地域でも、今はだんだん踊り手がいなくなって、できなくなってきた。図 23 は長野県の山の中の風流踊のひとつで、これは10年ぐらい前に見たのですが、現在は行われなくなってしまいました。そうかと思うと、新しい盆踊もあります。これは中野駅前で行っている盆踊です（図 24）。コロナ禍なので、大きなホールの中で制限した形でやっています。あるいはコロナ前ですが、「盆踊居酒屋」といって、居酒屋で盆踊を踊るなんていうイベントもあったりしました（図 25）。そのほか、図 26 は北海道の盆踊で、新潟県から移住していった人たちが伝えたものです。盆踊を通じて、自分たちのアイデンティティを残していくという意義もあるのではないかと思います。また、こちらは福島県



図 23 中井侍秋季例祭のかけ踊（長野県天龍村）  
かけ踊り（上）とお練り（下）



図 24 「中野駅前大盆踊り大会」（東京都中野区）



図 25 Bon Odori Izakaya（東京都新宿区）



図 26 高島越後盆踊り (北海道小樽市)

の盆踊が、ハワイに移住した人たちの中でも伝えられてきたということを取り上げた映画もありました(図27)。またさらに最近ではいろいろな新しい試みもあります。例えば図28は先週、青山で行われた郡上踊、図29は盛岡でビアフェスと一緒にさんさ踊をやるというイベント、図30は京都市の伝統芸能文化復元・活性化共同プロジェクトの支援で、8月20日に兵庫県の播州音頭が集まって記録もとりながら継承していこうという試みです。

そんなことで、長くなりましたがまとめます。風流踊の楽しみ方の一つとして、風流踊の歴史を感じて楽しもうということ。それから、長い歴史の中で変わってきた、その変化も楽しんだら面白いのではないかとことです。これで私の話を締めくくらせていただきます。どうもありがとうございました。

【参考文献】

- 福原敏男 2023『風流踊 歴史民俗画像を読み解く』岩田書院
- 本田安次 1960『日本の民俗芸能』朝日新聞社
- 山路興造 2023『『風流踊』の展開』『月刊文化財』717



図 27 中江裕司監督映画「盆唄」



図 28 郡上おどり in 青山



図 29 ビアフェス×さんさ踊り



図 30 播州音頭踊り大会

## ■ 当日配布レジュメ 1-1

## 「風流踊」の楽しみ方 ①歴史編

久保田 裕道

## 1. 風流踊とはなにか

(1) 風流とはなにか（『日本国語大辞典』より抜粋）

風流 ふりゅう：①「ふうりゅう②」に同じ

②祭礼の行列などで、服装や笠に施す華美な装飾。＊『百練抄』（1154）

③芸能の一種。（イ）華麗な仮装をし、囃し物を伴って群舞した、中世の民間芸能。またその囃し物。後には、趣向をこらした山車などや、それを取り巻いて踊ることをもいった。＊春のみやまち（1280）

風流 ふうりゅう：②上品で優美な趣のあること。＊『万葉集』（8C）

③美しく飾ること。数寄をこらすこと。＊『御堂関白記』（1010）

(2) 本田安次の「風流」分類（『日本の民俗芸能』）

①厄神祭に出たもの ②仮装に出たもの ③田囃子に出たもの

イ. 念仏踊 ロ. 盆踊 ハ. 太鼓踊 ニ. 鞆鼓獅子舞 ホ. 小歌踊 ヘ. 綾踊

ト. つくりもの風流 チ. 仮装風流 リ. 練り風流

ヌ. アイヌの舞踊 ル. 沖縄の舞踊

(3) 文化庁の分類

①神楽 ②田楽 ③風流 ④語り物・祝福芸 ⑤延年・おこない ⑥渡来芸・舞台芸 ⑦その他

## 2. 風流踊の発生

(1) 念仏踊・踊念仏

①踊念仏：平安時代に空也が始めたとされ、鎌倉時代に一遍が広めた（『一遍上人絵伝』1299）。念仏や和讃を唱えながら、唱える人自身が踊るもの。

②念仏踊：菅原道真（9C）や法然（13C）の伝説が残るが、発生は不明。「踊念仏」との差異点として、踊り手と歌い手が分かるとされる。15C頃から「風流」的な念仏踊が登場した記録が見られる。

(2) 田楽風流

永長の大田楽（1096）：笠指山鳥尾、若人々此外風流、錦繡作花…

(3) 盆の風流

①『経覚私要鈔』（1415～1472）：盆の風流踊（作りものと劇的要素を兼ねそなえたもの）

文安4（1447） 風流為之、猿楽也、風流天岩戸ノ事也



## ■ 当日配布レジュメ 1-2

長祿2 (1458) 先有笠、次鷺二人舞之、次延年…

文明1 (1469) 駒舞、神輿振り、紙製の桶を頭に載せた踊り

※林間(淋汗)風呂における風流としての茶の湯も行われた。

### ②『春日社司祐維記』(1521)

傘鉾3本、小袖を腰巻とした踊り衆による「薩摩踊」「西行桜」「新発意太鼓」「五位鷺」

### ③『豊国神社祭礼屏風』(1604) 豊臣秀吉七回忌

#### (4) かぶき踊り

江戸初期にお国という女性が演じたとされる「かぶき踊り」が京都で流行すると、女性芸能者による「女歌舞伎」が生まれ、江戸・大坂でも流行した。流行のあまり禁令が出され、かぶき踊りは少年による「若衆歌舞伎」に、それも禁止されると成人男性による「野郎歌舞伎」へと変化し、内容も舞踊から演劇としての性格を強めていった。

## 3. 風流踊の展開

### (1) 風流囃子物

①傘鉾・風流傘(装飾的な長柄の大傘)や人形などの造り物や仮装を伴って、太鼓・鞆鼓・笛・摺鉦・鼈などで囃し踊る芸能である。(福原敏男『風流踊 歴史民俗画像を読み解く』)

②室町時代も後期になると、この思い思いの仮装の者や囃子方が、大きな風流傘を中心にして核となり、その周りを揃いの衣装や、同じ趣向の花笠、採り物などで揃えた大勢の踊り手が囲むという、新しい風流踊の形態が登場する。

輪の中で踊る仮装の者や囃子方を「中踊り」、周囲を取り囲む揃いの趣向の踊り手を「側踊り」と呼ぶのが一般的で、歌われる歌謡も組歌形式の長めの歌詞が登場し、曲目の名称によって、踊りの芸態を次々に変えていく。(山路興造「『風流踊』の展開」『月刊文化財』717)

### (2) 風流踊の願い

#### ①やすらい花(鎮花祭)(京都府京都市洛北地域)

京都市の洛北で4月に行われる。花しずめの祭りともいわれ、桜の花が散らないことを祈って踊る。花が散ると、疫神や悪霊も一緒に飛び散ると考えられた。平安時代後期から続く。傘ぼこ、花傘などと呼ばれる、先端に草花をつけた大きな風流傘が登場し、この傘の下に入ると、厄除けになるといわれている。また踊り手はシャグマと呼ばれる赤や黒の毛を振り乱し、大鬼、小鬼などと呼ばれる。一行は町内を練り歩きながら、今宮神社へと向かう。今宮神社には、平安時代以前から疫神を祀る社があったと伝えられている。

#### ②近江のけんけと祭り長刀振り(滋賀県)

滋賀県南部に伝わる「けんけと祭り」は、京都の祇園祭で行われていた踊りや囃子が、各地に広まったものの一つ。竜王町では5月3日に行われている。これもまた厄神を送り出すための祭りである。ケ

## ■ 当日配布レジュメ 1-3

ンケットという名称は、鉦の音を口で真似した言葉に由来するという。イナブロと呼ばれる作り物には、鷺が描かれている。ここに疫神を集めて地域の外に追い出すのが目的。時々倒れると、イナブロに付けられた五色の短冊を、観客が争って取っていく。踊るのは長刀振りの振子。ここに鉦打ち、太鼓打ちが加わる。途中途中で長刀の仕舞振りといって、長刀の個人芸が繰り広げられる。

## ③綾子踊（香川県まんのう町佐文）

祈雨などの口上の後に、女装した男児の子踊、鉦や太鼓を奏する大踊などが続く。「水の踊」「四国踊」「綾子踊」といった演目毎に、小歌に合せた踊りが演じられる。この小歌による踊りに、初期歌舞伎（かぶき踊り）の様子が窺える。また口上で語られるように、この踊りを踊る意味もまた「風流踊」の重要な要素となる。現在では必ずしも祈雨のためではなく、水に対する感謝の念を唱えるようになったというが、その反面、綾子踊の由来伝承としては祈雨の伝説が強く語られるようになった。しかし「綾つ子」という言葉が魔除けの印を意味しているように、本来は祈雨に限らず日照りや虫害、風害などの災いを払うための祈願であった。

## 4. 「風流踊」の多様性

## (1) 「風流踊」の意義

文化庁「『風流踊』のユネスコ無形文化遺産への提案について」報道発表資料別紙（2020年3月）  
 新島の大踊（東京都）：踊りの所作や風流傘など、中世に流行した風流踊の遺風が認められる  
 毛馬内の盆踊（秋田県）：祖先供養の盆踊に娯楽的要素の踊りが加わって今日の姿に至るまでの変遷の過程を示し、また地域的特色も顕著である

## (2) 「山北のお峰入り」（神奈川県）

遡ることのできる最古の記録は、幕末の文久三年（一八六三）。そもそも不定期開催の行事であるために、その後の長い休止も含め、平成二十九年（二〇一七）までに十四回しか開催されていない。それゆえ歴史的な経歴はほとんど不明であり、中心的要素が判り難い「風流踊」である。お峰入りという名称からは、修験道の入峰儀礼的な要素が窺えるが、実際には「修行踊り」という山伏の所作を見せる演目があるほかに、修験道的な要素は見られない。むしろ「奴踊り」や「棒踊り」などの風流的な要素が強く、さらには蹴鞠の所作を見せる「四節踊り」のような変わった演目もある。

## (3) 消えゆく風流踊

\* 市来の七夕踊（鹿児島県いちき串木野市） \* 中井侍秋季例祭のかけ踊（長野県天龍村） 等々

## (4) 新しい盆踊り

\* 総持寺「み霊祭り納涼盆踊り大会」（神奈川県横浜市鶴見区）  
 \* 「中野駅前大盆踊り大会」（東京都中野区）  
 \* 『Bon Odori Izakaya（盆踊り居酒屋）』（東京都新宿区）  
 \* フクシマオンド（米国ハワイ）



## 2. 音楽編

川崎 瑞穂（聖心女子大学非常勤講師）

### 1. 風流系芸能の打楽器

みなさん、こんにちは。楽しみ方の2として、これから音楽について紹介していきたいと思います。今、久保田先生にお話いただきましたように様々なお祭りが行われているのですが、その中で、特に「音」について考えてみます。と言いますのも、お祭りにはいろいろな音が使われているわけです。例えば楽器に注目してみますと、いろいろな楽器があります。管楽器、打楽器、弦楽器、あとは楽器だけではなくて歌もあります。そんな形でお祭りを彩る要素のひとつが、この「音」ということになります。

今回はその中でも特に、打楽器と歌について考えます。打楽器と言ってもすぐ思い浮かぶのは太鼓かなと思います。画面に示されているのは、後ほど実演していただく西馬音内盆踊の楽器の演奏風景です（図1・2）。図2に大小の太鼓があるほか、図1には小鼓（鼓）があります。小鼓の横には鉦（かね）がありますが、こうした金属製の楽器も、風流系の踊りにはよく使われています。みなさんにお配りした『伝統と文化』（第46号、ポーラ伝統文化振興財団2023年）という雑誌があります。この表紙はまさに後でみなさまに見ていただく西馬音内盆踊ですが、こちらの8～9ページにかけて西馬音内盆踊の説明が入っています。こちらを併せて見ていただくとよいかなと思います。

さて、この鉦の音ですが、とても特徴的なわかりやすい例として、祇園祭のいわゆる祇園囃子というものがあります。「コンチキチン」という音でよく表現されるのでご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが。少しだけ音と映像を流してみます。

—映像（割愛）—

こんな形で、とても鉦の音がわかりやすかったのではないかなと思います。先ほど「コンチキチン」と言いました。これはまさにこの鉦の音を示している言葉ですが、こういった鉦の音を表現した言葉が、お祭りの名前になっているものがあります。例えば滋賀県に行くと、先ほども少し話に出てきたケンケト祭りというものがあります（図3）。この「ケンケト」というちょっと変わった言



図1 西馬音内盆踊の小鼓・鉦



図2 西馬音内盆踊の大小太鼓





図3 ケンケト祭り（滋賀県）

葉は、楽器の音に由来していると考えられるのです。特にこういった楽器は、演奏を覚える際などに唱歌しょうがというものを使います。口唱歌くちしょうがとも言いますが、つまり楽器を覚えるときに歌う歌のことです。例えば三味線の「チントンシャン」とか、太鼓の「ドンドン」「カッカ」、ああいったものも唱歌ということになります。こういったものを題名に持っている芸能が結構あるわけですね。例えば変わったところだと長崎県にチャンココというお祭りがあります。「チャン」が鉦の音で「ココ」が太鼓ではないかと言われていたのですが、このようにいろいろな種類があります。少しだけケンケト祭りを御覧ください。

—映像（割愛）—

こんな形で、鉦の音と言ってもいろいろな種類があるわけですね。そのリズムも様々ですが、どうやって演奏するか、その演奏の方法も様々あります。例えば鉦を置いて使うのか、吊るして使うのか、持って使うのか、それによって用途なども変わってきます（図4）。特に関東の祭囃子などでは「チャンチキ」、あるいは「摺鉦」「当たり鉦」「四助」などとも呼ばれる、直接持って鳴らすタイプのものを見かけるかもしれません。こうしていろいろなタイプがあるというわけです。ひとつだけ例を見てみたいと思います。これは京都の久世六斎保存会の祇園囃子の鉦の音です。

—映像（割愛）—

こういった鉦はとても涼しげでいい音がしますね。先ほど久保田先生のお話にも出てきました、いわゆる「はやしもの囃子物（拍子物）」にも、もちろん様々な楽器が使われています。例えば図5は鳥根県の「津和野の鷺舞」です。鷺の格好をして舞う、とても有名で美しい芸能ですが、ここでも様々な音が使われていますので映像をお見せしたいと思います。

—映像（割愛）—



図4 民俗芸能のいろいろな鉦

4-1 祇園祭花傘巡行における久世六斎保存会《祇園囃子》（京都府）

註：（祇園囃子）図像資料における鉦の初出は16世紀中頃。のちに「手下げ」から「吊り下げ」に変化（田井 2010：524・526）

4-2 「吊るす」鉦  
新浜獅子舞（香川県）

4-3 「持つ」鉦  
数河獅子の行列（鬮鶏楽 / 岐阜県）

4-4 「吊るして持つ」鉦  
白久の川瀬祭り（埼玉県）

## 2. 風流系芸能の歌の形式

お気づきになったかと思いますが、楽器だけではなくて歌も使われています。盆踊や風流踊の歌には、様々な型、システム、仕組みがあります。特に注目してみたいのが、いわゆる音数律おんすうりつと言われているもので、音節の数によってシステムが異なってくるわけなんです。例えばここにとっても有名な2つの形式を挙げておきました。「小唄形式」と「口説形式」です。小唄形式というのは、近世小唄調などと呼ばれることもあります。7775 という数で歌われるものです。わかりやすい例としては都々逸とといつという、いわゆる俗曲ぞっきょくと言われているものがあります。これは江戸末期に成立した三味線伴奏の音楽ですが、美空ひばりさんの《車屋さん》(1961年、日本コロムビア)という曲がありまして、その曲の途中に、まさにこの7775がわかりやすい形で出てきます。そこでは「人の恋路を 邪魔する奴は 窓の月さえ 憎らしい」(作詞・作曲：米山正夫)と歌うわけなんです。まさに7775の形になっています。後ほどみなさんに実演を見ていただく西馬音内盆踊でも、この7775を聴くことができます。そこでは「甚句」という言葉で呼ばれています。7775になっている部分がありますので、ぜひみなさんも実演を見るときに、数えながら聴いてみるとよくわかるのではないかと思います。

今言いました甚句というのもよく出てくる言葉です。よく盆踊歌のことなどを示すわけですが、これもまさに7775の民謡のことを言います。これに対して「口説形式」はどういったものなのかということですが、こちらは7575あるいは7777といった形で歌っていくものです。これはとてもわかりやすい例がありますのでちょっと紹介したいと思います。この『伝統と文化』第46号でも取り上げましたが、10～13ページに岡山県の白石踊の紹介を書きました。とても美しい風景の場所で演じられますので映像も見てみますが、ここで歌われる口説が7777になっています。今からご覧いただく映像で歌われている楽曲は《那須与一》です。とても有



図5 津和野の鷺舞 (島根県)

### 「拍子物」(囃子物)

南北朝時代以降に近畿地方で形成された芸能。仮装した者や作り物を音楽(種々の楽器と歌)で囃す。

例：祇園会の「笠鷺鉦」(鵺鉦)と「鷺舞」

### 「音数律」

音節の「数」で組み立てる韻律のこと

### 「西馬音内盆踊」の「地口」

・音頭：詞型「889・889」(六句)

・甚句：詞型「7775」(四句)

※甚句とは主に「7775」の民謡(盆踊唄)のこと、西馬音内では「がんけ」で歌う

### 「小唄形式」(近世小唄調)

詞型「7775」、全国的に分布

例：都々逸、江戸末期に成立した三味線伴奏の俗曲(酒宴等での民謡の歌)

### 「口説形式」

詞型「7575」・「7777」、主に西日本を中心に分布

### 白石踊の口説《那須与一》(岡山県)の一部

的の扇を／立てたる時に

ホラヨーホイヨーホイヨーイヤナイ

九郎判官／此の由御覽

アーンレサイ

那須与一を／御前に召され

ホラヨーホイヨーホイヨーイヤナイ

与一御前に／相ひ詰めければ

アーンレサイ



図6 白石踊（岡山県）

### 「くどき」とはなにか？

- ・7777の詩型を2小節1句として同じ節を繰り返す。「くどくとおなじ節をくりかえす」から「くどき」
- ・節を一つ覚えれば長い叙事詩でも歌うことができる（「一大革命」）  
(五来 1995: 60-62)

### 【民謡における「口説き歌」】

- ・長編の叙事詩を同じ旋律の繰り返しのせて歌うもの。
- ・「盆踊り」だけでなく、「木遣り」などといった様々な民俗芸能においても歌われる。
- ・口説 → (地名等を冠する) 音頭 へ

### 現在の盆踊と「音頭」

#### 【伝統的な音頭】

- もともと「音頭」／雅楽用語で「首席奏者」各地の盆踊り等の「音頭」
- 例：《伊勢音頭》
- ※「音頭一同形式」(コールアンドレスポンス)
- 例：メインボーカル(音頭) ↔ コーラス(一同)

#### 【創られた音頭】

- 特徴「ドドンガドン」「掛け声」など  
新しいメディアと不可分(大石 2015: 6)
- 例：《東京音頭》(1933年)  
《ドラえもん音頭》(1979年)

名な物語ですが、この《那須与一》ではまさに、物語を7音節ずつ語っていくわけなんです。まず「的の扇を立てたる時に九郎判官此の由御覧」、九郎判官は源義経ですね。このような形で、全部7文字で続いていきます。こういった歌では、間に挟まる「はやしことば」がよく使われています。ここでは「ホラヨーホイヨーホイヨーイヤナイ」、「アアソレサイ」という囃子詞が共通して用いられます。歌うメロディーも基本的には同じなわけです。これがとても重要なポイントで、同じメロディーで歌詞を変えてどんどん歌っていくというのが、こういった歌のスタイルになってくるわけです。海でやっているのだからちょっと音が聴こえにくいのですが、雰囲気だけでも味わってもらおうかなと思います。

#### —映像(割愛)—

こんな形で、口説のポイントが7777を繰り返す、くどくと同じ節を繰り返すということになります。先ほども言いましたように、とても重要なポイントは、とにかく節をひとつ覚えていればどんな長い歌でも物語でも歌うことができることです。民俗学者の五来重さん(1908-1993)などは、これを「一大革命」だと言っているわけですね(『宗教民俗集成5 芸能の起源』角川書店、1995年)。どんなに歌が上手でも下手でも、とにかくひとつさえ覚えてしまえば歌っていくことができます。こういったものが盆踊だけではなく、例えば木遣りなどにも歌われています。こういったいわゆる口説から、「音頭」というものが出てきます。

音頭という言葉もよく聞きますよね。例えばイメージしやすいのは《東京音頭》(1933年)や、比較的最近で言えば《ドラえもん音頭》(1979年)などにも音頭という言葉がついています。こういったものは、もちろん新しく作られたものですが、特徴としては掛け声が入っていたりする。あとは太鼓の「ドドンガドン」というリズムなどもわかりやすい例です(詳細は大石始『ニッポン大音頭時代—「東京音頭」から始まる流行音楽のかたち—』河出書房新社、2015年)。もちろん日本各地には様々な音頭が伝わっていて、《伊勢音頭》など地名をつけた音頭もあるわけです。



この音頭にどういった意味があるのかということですが、元々は雅楽用語です。「音頭<sup>おんどう</sup>」と言いますが、これはその楽器の主奏者、首席奏者、そういった役のことを指すわけです。例えば音楽学の分野で音頭<sup>おんど</sup>一同形式<sup>いちどう</sup>という言葉があります。これは、例えばメインボーカルがいて、一同が歌って、というような繰り返しで歌われるもののことで、こういった特徴を備えているものが音頭というものではないかと思えます。こういった現在の盆踊の展開については、『伝統と文化』の冊子の16～17ページに俵木先生の文章がありますので、そちらも併せてご覧いただきたいと思えます。

さて、あと少しの時間になってきましたので、他の楽器は簡単にまとめます。横笛にも篠笛などのほか(図7)、能管を使う地域もあります。祇園囃子などは、この能管を使うというのが特徴的です(図8)。そのほかには弦楽器。後でまさに実演で出てくる三味線のほか、胡弓など、いろいろな楽器を使います(図9)。

### 3. 音の「意味」を考える

では最後に、こういった音にはどういった意味があるのかを、少しお話ししたいと思います。囃子<sup>はやし</sup>と言いますが、これにはいろいろな解釈があります。例えば、この「はやす」には、何か目に見えない神霊を分割したり、増やして移動させる、そういったモノに働きかけるというのがポイントではないかという説があります。また、何か対象を引き立たせる、「榮やす<sup>は</sup>」というところから来ているのではないかという説もよく言われます(三浦1998)。実際、先ほど出てきた「囃子詞」という時の「囃子」などは、こちらの意味で考えればわかりやすいのではないかと思います。こんな形で、例えば疫病を流行らせる神様など様々なものに働きかけていくわけですが、こういった目に見えないものに働きかける音楽が囃子であったのが、だんだん、山鉦のようなとても大きなものを動かすときにも、人々を元気づけたりと、合図を送ったりと、いろいろな形で使われるよ



図7 篠笛(横笛)／篠ノ井祇園祭(長野県)  
(福原鶴花氏撮影)



図8 祇園祭長刀鉦の祇園囃子(京都府)  
(2011年仙台出張公演／福持昌之氏撮影)



図9 西馬音内盆踊の三味線(秋田県)

#### 見えないモノ／見える物をうごかす 音楽としての囃子

- 「はやす」：神霊を動かすこと  
 → 「山鉦」(やまほこ・やまぼこ) 自体を動かす「囃子」へ  
 → 楽器：音が大きくて周囲に聞こえやすい鉦が中心に (山路 2009: 113)





図 10 「祇園祭」(京都府)

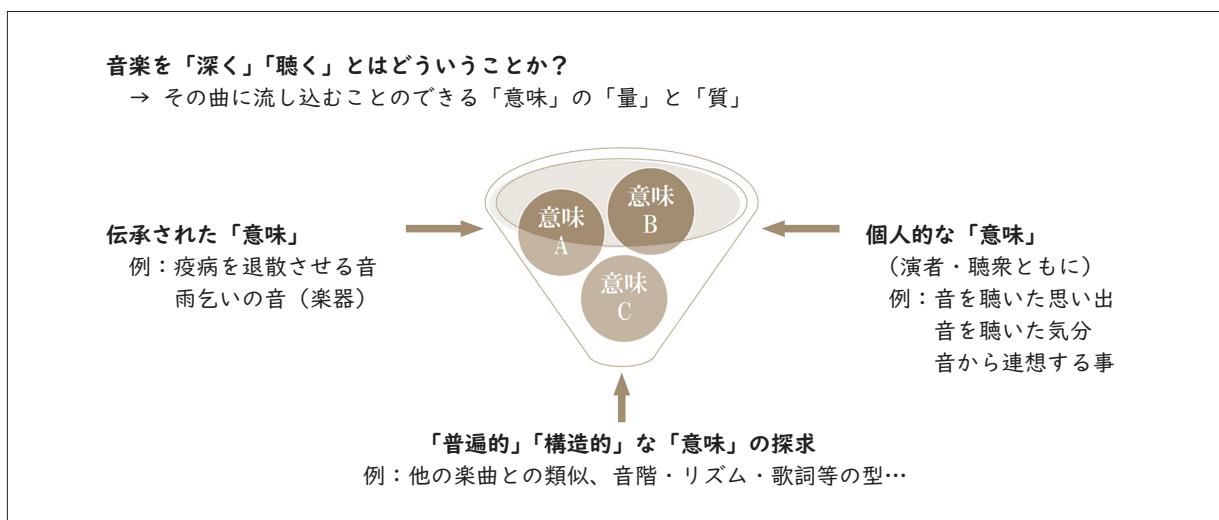
うになってきます(図10)。そうすると、やはり音が大きくて周りに聞こえやすいことが大事になってきますので、先ほど紹介した鉦などはとても重要性を帯びてくる。そういった具合に変化して、今日に至っているという説もあります。こういった囃子の研究はたくさんありますので、資料の最後のところに簡単に参考文献を挙げておきました。よかったらそちらを頼りに調べてみると面白いのではないかと思います。

さて、こんな形で音楽について考えてみました。最後に、音楽を「深く聴く」とはどういうことかということ、少しだけ考えて終わりにしたいと思います。今回お話したのは、いわば音楽の仕組みです。構造、音節の数のような普遍的な意味を考えてみましたが、ほかにもリズムや音階など、いろいろなものがあります。そういった構造の視点で、音楽の意味を考えることもできます。ただし、音楽の意味というのは

それだけではないですね。これは結構大事なポイントで、みなさんも音楽を聴く時に、そこにいろいろなことを感じると思うんですね。それは個人的な感想でもいいわけですが。とても綺麗な音だな、初めて聴くのに懐かしい音だなとか、いろいろなことを感じる。音というのは、音自体には意味が入っていませんから、聴く側がどんどん意味を入れていくわけですね。そこにどういった気持ちを見出すのか、これもひとつの大事な音楽の意味ということになるわけです。

それだけではなくて、こういったお祭りの音楽の場合は、この音が何を意味するのか、そういったことも伝わっていることがあります。例えば、雨乞いのための音楽や楽器だという考え方、あるいは疫病退散のための音楽や楽器だとか、そういった考え方もあるわけです。

こういったものも全部含めて、音楽の「意味」だということになります。音楽を深く聴くというのは、そこにいろいろな意味を入れ込んでいくということなのだと、こういったことを覚えて聴いていただけるとよいのではないかと思います。研究という視点でみるのもよいですし、自分がそこから何を得るか、何を感じるかということも大事にさせていただいて、かつ、人々がそれをどうやって考えて受け継いできたのか、こういったことも考えながら、風流踊をはじめとする芸能を楽しんでみるとよいのではないかなと、そういう話でした。私の話は以上になります。ありがとうございました。



## 楽しみ方② 音楽編(川崎瑞穂)

### —— 補足・参考資料(主な先行研究の紹介) ——

- ・ 人も神霊も「ハヤシ」で動く
  - 『梁塵秘抄』(巻2)の今様  
「をかしく舞ふものは、<sup>かなぎ</sup>巫、<sup>こならは</sup>小檜葉、<sup>くるま</sup>車の筒とかや、平等院なる<sup>みづ(ず)ぐるま</sup>水車、囃せば舞出づる<sup>いぼうじり</sup>蟪蛄、<sup>かたつぶり</sup>蝸牛」  
「舞ゑ舞ゑ蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴ゑさせてん」
  - ◇ 囃すという行為…動かぬものを動かそうとする機能を帯びていた [植木 2010:55]
  
- ・ 祇園祭の山鉦:風流拍子物から展開
  - 風流の追求 → 風流本来の造形美に傾斜 → 巨大化への道を選んだところに成立
  - 拍子物の「囃す」という側面:「祇園囃子」へと収束され、音曲化。  
[植木 2010:57-58]
  
- ・ 囃子…「<sup>は</sup>榮やす」という動詞 ⇒ ある対象を引き立たせる行為 [三浦 1998:32]
  
- ・ 現在の祇園囃子の目的:山鉦の進行を囃すこと
  - 山鉦に限らず、物を動かすときには囃子が必要とされた。
    - ◇ 「はやす」…物の霊を分裂させ、殖やすこと(折口信夫『古代研究』他)
      - 神座としての山(祇園会の山:本物のような山を作り、神座としての木を立てる)や鉦を曳きまわすためには、囃子が必要であった。  
[山路 2009:113]
  
- ・ 中世後期の山・鉦の囃子の主たる目的:それぞれの芸能を囃すこと
  - 巡行では山鉦を動かすための囃子として機能[山路 2009:113]
  
- ・ 山・鉦上の芸能の形骸化…囃子の目的:山鉦の巡行を囃すことに変質
  - 山鉦を動かす囃子としての機能が大きくクローズアップされる
    - ◇ 音が大きく周囲に聴こえやすい鉦が中心化
    - ◇ 山・鉦が別々の囃子を奏する必要はなくなる → 同じ系統の囃子になる[山路 2009:113]

### ～ 主要参考文献 ～

植木行宣 2010 『風流踊とその展開—植木行宣 芸能文化史論集 3—』岩田書院

植木行宣 2022 「基調講演 祇園囃子の誕生—<sup>ふりゆうはやしもの</sup>風流拍子物から山鉦の囃子へ—」『民俗音楽研究』第47号、pp.47-57

大石始 2015 『ニッポン大音頭時代—「東京音頭」から始まる流行音楽のかたち—』河出書房新社

五来重 1995 『宗教民俗集成 5 芸能の起源』角川書店

田井竜一 2010 「画像資料にきく「祇園囃子」」植木行宣・田井竜一(編)『祇園囃子の源流—風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ—』岩田書院、pp.513-546

三浦裕子 1998 『能狂言の音楽入門』音楽選書(79)、音楽之友社

山路興造 2009 『京都 芸能と民俗の文化史』思文閣出版





## 3. 装い編

俵木 悟 (成城大学 文芸学部)

### 1. 風流踊とは

成城大学の俵木と申します。私からは風流の装いということでお話をさせていただきたいと思います。そもそも風流とは何かというお話を最初にちょっと掲げたのですが、これは先ほどの久保田さんのお話ともかぶるところが多いと思いますので、ごく簡単にお話します。元々は雅やかさや華やかさを表す言葉で、またそのために趣向を凝らすというのでしょうか、工夫をするというのが本来の意味であります。ですから常に新しいものや華やかなものを作っていくという、本質的に創作的なもので、それ故、形的には非常に多様な展開を示します。それが現れた祭りや踊りなどもひとつの形に収まらず、様々な姿に移り変わってきましたので、一見するとなぜこれが同じ種類の踊りとして扱われているのか、わからないくらいです。

その点で、飾り立てるとか装うというのは、風流の性質の中でも特に重要なものだと思います。私のお話でもこの「装う」ということをキーワードにお話させていただきたいと思います。

風流踊は、歴史的には都市の祭礼の中から生まれたと考えられています。その都市には商工業者が集まって、財力はもちろんですが、モノや技術、情報などが集まっていて、それが新しい趣向を凝らす原動力になったわけですね。新しく華やかで見栄えのする趣向を競い、見物もそれを楽しみにしていた。例えば祭礼の時には、町ごとの出し物を描いた番付が作られたりしました。お客さんもそれを見て、「今年は何々町はこういうものを出すのだ」というようなことを知ると。それを楽しみにしているわけです。

一方で、都市的な環境が生み出したと風流というのも、やがて地方の村落社会に定着していきます。その時には都市のような様々な趣向が集まるわけではなく、土地土地、村ごとに「オラが村の踊り」として定着していったと考えられます。その際には似たようなものが近隣の村々に伝わるからこそ、あえて他所とは違う特徴みたいなものが生み出されていったというふうにも考えられるわけですね。また土地ごとに伝えられていく過程で、やはり独自の小さな趣向が蓄積されていって、それが風流踊の地域的特色を形成する要因になっているということです。

### 2. 風流踊に見られるさまざまな装い

#### 風流踊の装置

ここから具体的に、どのような装いがあったのかを見ていきたいと思います。

最初に、ちょっと強引ですが、「風流の装置」というものを考えてみました。もちろんその最たるものは山鉾<sup>やまほこ</sup>や山車<sup>だし</sup>、屋台などといった大型の構造物ですが、それだけではなく、例えばあるものを題材にした「つくりもの」を作って、それと関連する歌や踊りなどを組み合わせてひとつのテーマを演



図1 七夕踊のツクイモン（鹿児島県市来串木野市）



図2 京都祇園祭の綾傘鉦（福持昌之氏撮影）



図3 玄武やすらい花（京都市／福持昌之氏撮影）

じるようなものがあります。これは鹿児島県いちき串木野市大里の「市来の七夕踊」の動物のつくりものです(図1)。つくりものが4体出るので、この写真の虎は、その前に見える虎捕りの役の人も含めて、全体で朝鮮出兵の際の虎狩りの故事を寸劇的にコミカルに演じる趣向です。

神田明神の祭りには、大ナマズのつくりものが出ています。江戸時代の祭礼絵巻に描かれたものを再現したのですが、ただのナマズではなくて頭を石で押さえられています。要は地震を起こすナマズを抑える、鹿島の要石の話にちなむ趣向です。現在はつくりものの造形として楽しまれてるようですが、近世の絵巻では、ここに鹿島踊という踊りや、白丁姿の仮装行列なども描かれていて、全体として、「鹿島」をテーマにした趣向の一部だったということがわかります。

他にも練り物を構成する要素としては、切子や灯籠などの火を灯すもの、これは現在の祭りの提灯にも繋がるかもしれません。また万燈<sup>まんとう</sup>などと言って長い棒に花飾りなどをつけて掲げて歩くもので、場合によってはそこに町の名前や町印などを書いて、看板やプラカードのように持ち歩くものなどもあります。

その中でも、特に風流踊に繋がる重要な練り物の装置が、傘です。中世以来の祭礼絵巻には、必ずといっていいほど、大きくて目立つ飾りをつけた傘や、それと鉦が一体となった傘鉦<sup>かさぼこ</sup>と呼ばれるものが描かれています。現在の京都の祇園祭にもこのような傘鉦が伝えられています(図2)。傘の先には、たいてい鉦状のものや幣束<sup>へいそく</sup>などの飾りがあ

って、また傘幕は赤などの目立つ色や、豪華な刺繍、あるいは模様が入っています。この傘は、それ自体が祭礼の行列の一部として移動するわけですが、移動させるのに音曲で囃したり、歌を伴う踊りが付随することがあります。手塚治虫の『火の鳥』乱世編に、先頭に傘をささげ持つ人がいて、その後に太鼓打ちや笛吹などが従って、そしてシャグマをかぶり、小さな太鼓を手を持って歌に合わせて踊る人が描かれている場面があり、時代は平安時代の終わり頃となっています。この時代が正しいのかどうかちょっと私には判断できませんけれども、この姿にはモデルがあって、これは今も京都に伝わっている「やすらい花」という風流踊を描いたものです。図3のようなものですが、ほとんど漫画に描かれた姿と変わりません。奥に風流の傘も見えています。このように、おそらく本来は山鉦<sup>えきじん</sup>などと同じように疫神を依りつける装置だと



考えられている傘と、それを囃して動かす囃子や踊りがセットになった出し物が、風流囃子物と呼ばれたわけです。先ほど紹介した京都の祇園祭の綾傘鉦も、ただ傘鉦として移動するだけではなく、それと一緒に<sup>ぼうぶりぼやし</sup>棒振囃子という芸能がついて回って、特定の場所に来ると踊りを披露するわけです（図4・5）。

このように練り物の要素であったつくりものや傘鉦などを囃して動かすものであった囃子や踊りが、それ自体が主体となって演じられるようになると、それが風流踊になるのだろうと考えられています。そうしたものが徐々に大規模になって、祭礼行列から独立し、ひとつの場所で踊りとして催されることで、風流踊の姿が整えられたと考えられます。

先ほども出てきましたが、豊国神社の臨時大祭を描いた絵には、よく見ると、傘幕の上に虎のつくりものを載せた傘や、やや小ぶりの傘などと共に、とりどりの奇妙な扮装をした人たちが中で踊っていて、その周りを、赤い格子模様のお揃いの服を着て編笠をかぶった人が踊りの輪として取り巻いているという形で描かれています。これは風流踊の本場に近い近畿圏の例ですが、同じような構成を持つ踊りは全国に広まっています。ここに挙げたのは千葉県南房総市の「白間津のオオマチ」というお祭りに入るささら踊です（図6）。真ん中に日天・月天<sup>にってん がってん</sup>という神様役が太鼓を打って、その周りを揃いの衣装で、ささらを摺る踊り手が円になって取り巻くという構造が見られます。

### 風流踊の装身具

次に紹介したいのは、練り物の装置が、人が身に着けるもの、すなわち装身具となって、風流の装いとなっているものです。中でも特に風流を特徴づけるものとしては花笠が挙げられると思います。

「洛中洛外図屏風」には、京都の市中の辻で演じられている初期的な姿の風流踊だと考えられるものが描かれています。先ほど紹介した17世紀初頭の「豊国祭礼図」よりは小規模ですが、頭に花籠や鳥のつくりものなどを載せた姿の踊り手が中に描かれていて、編笠のてっぺんに花をつけたものをかぶった揃いの衣装の踊り手がそれを取り巻いているという構造が見てとれます。先ほど、御幣や鉦などを取り付けて手にささげ持つ、大型の風流の傘を紹介しましたが、ある意味ではそれを頭の上に乗せている形になっています。



図4 京都祇園祭の綾傘鉦（福持昌之氏撮影）



図5 京都祇園祭の綾傘鉦 棒振囃子（福持昌之氏撮影）



図6 白間津のオオマチ（千葉県南房総市）ささら踊り





図7 寒水の掛踊 (岐阜県郡上市)

図7は岐阜県郡上市の「寒水の掛踊<sup>かのみず かけ</sup>」という風流踊ですが、笠のてっぺんに木の枝を立てたような形の花笠をかぶっています。こうして見ると、手に捧げ持つ風流傘のように、疫神や精霊を依りつかせる装置としての役割をわずかに残しているのかもしれませんが、やはりそれよりも、装飾としての意味合いが強くなっているのがわかります。先ほど、傘に似た機能を持つ物として灯籠などを紹介しましたが、図8の京都の「久多の花笠踊<sup>くた</sup>」ではまさに花笠が灯籠になっていて、それを手に持って踊るといふ珍しい形態が見られます。手で捧げて持つ傘や灯籠と、頭にかぶる花笠の中間的な形態と言えるでしょうか。花笠は風流



図8 久多の花笠踊 (京都市左京区/福持昌之氏撮影)



図9 中津屋の嘉喜踊 (岐阜県郡上市)



図10 寒水の掛踊 (岐阜県郡上市)



図11 三倉の太鼓踊 (岐阜県揖斐川町)



図12 八朔太鼓踊 (鹿児島県三島村硫黄島)



図13 作伊太鼓踊 (鹿児島県日置市)



踊に限らず田楽などでも多用され、踊りには欠かせない装身具ですけれども、特に風流踊では、花笠が踊りそのものを特徴づけるものとして象徴的に用いられる例が多いです。

もうひとつ、風流踊の装身具として代表的なものは、腰のあたりにつける大型の背負いものです。矢旗<sup>やぼた</sup>やシナイ、梵天<sup>ぼんてん</sup>、ホロなどと呼び名は地域によって様々ですが、大きな背負いものを背負って大胆に振り回す形態を持つ踊りが、特に西日本の太鼓踊などには多いです。私が以前調査した岐阜県の西濃あたりにはこのような踊りが密集していて（図9）、狭い範囲にたくさんの踊りがあるのに、その背負いものの特徴がみんなそれぞれ異なっていて、それぞれの土地で工夫を凝らしていった結果、多様な様式が生まれたらしいことがわかります。これも「寒水の掛踊<sup>かのみず</sup>」です（図10）。図11は同じ岐阜県西部の三倉の太鼓踊ですが、踊りの輪の中に鉾<sup>ほり</sup>を手を持った武者姿の人が立っていて、古い絵に描かれた風流踊の様式が感じられるものです。またどれも、その前側の腰に太鼓をつけて、両側から打つという芸態も共通していて、だから太鼓踊と言われるのですが、西日本にたくさんこういった踊りがあります。この旧美濃国あたりが東の果てで、それより東になると数えるほどしかありません。西側はどこまで広がっているかという点、図12は鹿児島島の離島、硫黄島の八朔太鼓踊ですけれども、ほとんど琉球を除いた西の果てまで広まっているという感じです。ややシンプルではありますが、背負いものの形も、構造的には岐阜の太鼓踊とそれほど違いがないことがわかるかと思えます。

この鹿児島には太鼓踊がおびただしくあるのですが、こちらでは背負い物の形状に趣向を凝らしたことが見て取れます。例えば図13の作伊太鼓踊では、背負い物は大型の軍配のようになっています。この踊りは日置市伊集院町の徳重神社という神社で見たのですが、この日、同じ神社で見た徳重大バラ太鼓踊は、鹿児島でよく見る武者幟<sup>のぼり</sup>をそのまま背中に背負ってしまいます（図14）。とても重くて踊ることなんかできないのですが、それを背負うこと自体が、ある種の見世物になっているという感じで、しかも腰の太鼓もありえないぐらいの大きさになっていますね。こういった形に趣向を凝らしたものという感じです。

### 風流踊の仮装・扮装

次の装いは踊り手自体が別の何かを装う、つまり仮装や扮装といったものです。練りものの中でも仮装、今風に言えばコスプレというのが、代表的な風流の趣向のひとつだったわけですが、それが風流踊となっても、何かを装って演じるという形で残っています。

これは先ほど来、何度も話に出てきました鳥根県の「津和野の鷺舞<sup>さぎまい</sup>」です（図15）。鳥の鷺を象っているものです。それからこれは静岡県の「徳山の盆踊」に出る鹿ン舞の鹿です（図16）。鹿は日本人



図14 徳重大バラ太鼓踊  
(鹿児島県日置市)



図15 弥栄神社の鷺舞  
(鳥根県津和野町／川崎瑞穂氏撮影)





図 16 徳山の盆踊  
(静岡県川根本町／久保田裕道氏撮影)



図 17 金津流浦浜獅子躍 (岩手県大船渡市)



図 18 夏屋の鹿踊 (岩手県宮古市)



図 19 関白流小林獅子舞  
(栃木県日光市／久保田裕道氏撮影)

が人里近くで普通に見る大型動物でしたので、多くの風流踊の中に取り入れられています。みなさんもご存知かもしれませんが、東北のシシ踊と呼ばれるものもその一種です。ちなみに図 17 の大船渡の<sup>かなつ</sup>金津流浦浜獅子躍では「シシ踊」と呼んでるわけですが、宮古で見たこの「<sup>なつや</sup>夏屋の鹿踊」(図 18) は、同種の踊りなのは間違いないのですが、やっぱり「シカ踊」と呼んでいて、つまりここで言う「シシ」とは鹿のことだということがわかります。ここでもうひとつ注目すべきは、頭に抱いてるシシの頭にどうしても注目が集まるので、これはシシ踊という特殊な芸能だと思われるかもしれませんが、実は腰の前側に太鼓をつけて、長い背負いものを背負っているという意味では、西日本にある太鼓踊と共通のものとも考えられるわけです。

いま、鹿をシシと呼ぶというお話をしましたが、そうすると、動物仮装の中で最も多いのは、想像上の動物である獅子を演じる、いわゆる獅子舞と呼ばれる芸能です。詳しい方は、獅子舞は神楽じゃないの、と思われるかもしれませんが、ここでは 1 人で 1 頭の獅子に扮して、それが何頭かで組み合わせさせて演じるものを指します。特に 3 頭が 1 組になる例が多いので、三匹獅子舞とか三頭獅子踊などと呼ばれ、西日本の太鼓踊と入れ替わるように、関東を中心とした東日本にたくさん分布しています(図 19)。獅子といっても、これはあくまで想像上の動物に扮しているのであって、江戸時代の絵画などを見ると、むしろ龍に近い姿をしていることがわかります。

そうやって何かに扮するという意味では、例えば大名行列などもひとつの風流の趣向かと思えます。ここに挙げたのは赤穂の四十七士に扮した義士踊という踊りです(図 20)。このようなものは、おそらくこの芝居が当たって流行したからこそ、そのコスプレをするという芸が生まれてくるんだと思うわけですね。図 21 も似たもので、各地の虎舞や獅子舞の中では、<sup>わとうない</sup>和藤内という演目を演じるものがあります。近松門左衛門の『国性爺<sup>こくせんや</sup>



『<sup>かっせん</sup>合戦』で知られる豪傑に扮して虎を狩るというのがお決まりのモチーフで、その中には唐人という、要は外国人と言うのでしょうか、この画像ではとんがり帽をかぶった外国人に扮した登場人物などが出てきたりします。芝居の場面を演じる中で特徴ある身なりの人の仮装も含まれているというわけです。

### 風流踊の衣装

最後に装いの例として、衣装やそれに付随する化粧を取り上げましょう。風流の衣装には大きく2つの性格が同居しているのが特徴だと私は考えています。

それは一方では、多くの踊り手が揃いの衣装を着て、できるだけ同調して踊るということで、そのシンクロした一体感を演出するもの。これは<sup>くみおどり</sup>組踊などと呼ばれることが多いですが、踊りが町や村ごとに伝えられていることで、そのコミュニティの結束を表すというような性質も見られます。有名な徳島の阿波踊では、「<sup>れん</sup>連」というグループが揃いの衣装で一糸乱れぬ動きを見せるのがひとつの特徴になっているわけですが(図22)、もう一方で「ぞめき」といって、誰でも気軽に自分のスタイルで踊れる踊りというものもあって(図23)、どちらも踊りの重要な要素になっているわけです。

こちらは茨城県潮来市徳島地区の水神祭というお祭りで見たと、みろく踊りです(図24)。残念ながら東日本大震災以降、演じられる機会がなくなってしまったのですが、以前は地域の組が数年に一度当番が回ってくる時に、その組の婦人会の女性たちが揃いの着物をしつらえたというんですね。衣装を作って、かつそれを着て踊るのが楽しみで、それが踊りに参加する一番の動機だったという話を聞きました。学生と一緒に調査に行った時に、過去に作った自慢の衣装、これは実は一生に1回か2回ぐらいしか着ないものなのですが、それをわざわざいくつか出してきて、こうやって披露してくれました。祭りや踊りというのは、こ



図20 牛牧義士踊(長野県高森町)



図21 須原羯鼓舞(千葉県九十九里町)和藤内



図22 阿波おどり(徳島県徳島市)



図23 阿波おどり(徳島県徳島市)





図 24 徳島水神祭（茨城県潮来市）みろく踊り



図 25 鹿島神宮祭頭祭〔祭頭囃子〕（茨城県鹿嶋市）



図 26 島田大祭〔帯まつり〕（静岡県島田市）



図 27 西馬音内盆踊（秋田県羽後町）

うやって人前で堂々と綺麗な衣装を着られるまたとない機会だったというわけですね。

図 25 は鹿島神宮の一番大きな「祭頭祭」というお祭りの時に演じられる、祭頭囃子さいとうさいという芸能です。非常に派手で装飾的な衣装で、よく見るとみんな思い思いのぬいぐるみなどを背中に背負っていたり、髪も緑や赤に染めたりして、明日仕事に行くのは大丈夫なのかと心配になるわけですが、いつもと違う異装・変装を楽しんでいる様子がよくわかります。ところが一方で、全くの無秩序という感じでもなくて、色使いなどに何かしら統一感もあって、ただ単に変な格好をしているわけではないというのも、何となく感じられるところが面白いところです。

最後に図 26 は静岡県島田市の大井神社の、通称「帯まつり」というお祭りです。これは元は安産祈願だったと言われているのですが、お嫁さんの着物の帯をこのように太刀に掲げて見せることで、その地域の繁栄や家の経済力を示したり、また各自のセンス、あるいは威勢みたいなものを見せびらかして誇るという気分が感じられます。

というわけで、最後に衣装が美しい踊りといえば、我が国の中でも最高峰のひとつと思われるのが、今日拝見する西馬音内の盆踊です。例えば図 27 のような「端縫い」と「藍染あいぞめ」の衣装ですが、特に端縫いの衣装は古い着物などをとっておき、それを縫い合わせて作るもので、日常の生活の中で身近にあるものの中から工夫して生み出される装いの極致というべきものではないかと思えます。ぜひこの後の実演の際に、その衣装の美しさにも注目してご覧いただければと思ひまして、私の話は終わらせていただきます。ありがとうございます。

## 風流の装い

俵木悟 (成城大学文学部)

### 「風流」とは？

#### ふう-りゅう【風流】

(フリュウとも)

- ①前代の遺風。聖人が後世に残し伝えたよい流儀。
- ②みやびやかなこと。俗でないこと。風雅。
- ③美しく飾ること。意匠をこらすこと。
- ④衣服や車の上などに花などを飾ったもの。華美な作り物。
- ⑤日本芸能の一つ。→ふりゅう。
- ⑥風流韻事の略。

#### ふ-りゅう【風流】(・・リウ)

- ①→ふうりゅう。
- ②日本芸能の一つ。「みやびやかな」の意から出たもので、趣向を凝らした作り物や仮装を伴う。

『広辞苑』第6版

雅やかさ・華やかさを意味し、同時にそのために趣向を凝らすことを意味する。  
本質的に創作性をともない、一定の様式に捉われず多様な展開を示す。

つまり**装う**ことに風流の特質がある。

### 風流の源流

都市の祭礼：疫病を避ける、その原因と考えられた御霊・疫神を鎮送する。  
御霊を依り付けるもの（山・鉦<sup>ニ</sup>ダシ）と、それを囃して動かすもの（主として  
芸能）。  
囃すものと囃されるもの、それぞれに趣向を凝らし、その華やかさ、美しさ、新  
しさを競う。

### 風流の装飾

近世の都市社会の成熟 → 練り物の祭りの成立。  
町ごとの趣向と威勢の競い合い：懸装品、作り物、山車人形…  
付け祭り：踊り、囃子、仮装…  
村落社会への定着：一定範囲に同種の（しかし少しずつ違う）踊りが分布



## 風流踊に見られるさまざまな装い

### 装置

疫神や精霊を依り付けるもの、主として高く捧げ・掲げて目立たせる。

山・笠（傘）・鉾、切子・燈籠…

それ自体が華美に、装飾的に。 例）唐津くんちの曳山、博多祇園山笠など  
特に笠（傘）・鉾は囃子・踊りとセットに。 → 風流拍子物 → 風流踊

### 装身

囃されるものとしての装置が、身につけられる装飾となり、踊りの衣装・道具となる。

花笠（風流踊には特に多い）

大きな背負い物 例）太鼓踊系の風流踊、東北の鹿踊など

特徴ある採物 例）長刀振り、棒踊りなど

### 仮装・扮装

動物仮装の踊り

例）津和野の鷺舞、太平洋沿岸の虎舞、徳山盆踊りの鹿ン舞など

風流の獅子舞（三匹獅子舞）：太鼓踊りとの関係？

特徴ある身なりの人に扮する

例）唐人踊り、飴屋踊り、奴振りなど

芝居のキャラクターや場面を演じる

### 衣装

揃いの衣装

大勢が揃った美しさを表現するとともに、地域組織や年齢集団などコミュニティの共同性を表すもの。

銘々の衣装

ハレの気分の表現、異装や変装の快樂。ときには財力や威勢の誇示。

具体性の趣向：手近にあるものを工夫して美しいもの・独自のものを生み出す。

例）西馬音内盆踊りの藍染と端縫いの衣装

## 4. 関西地方の事例

### 森本 仙介（奈良県）

みなさん、こんにちは。奈良県庁の文化財保存課で民俗を担当しています森本と申します。今日は近畿地方の風流踊の紹介をしたいと思います。特に職場で担当している奈良県の事例が中心になるかと思いますが、よろしくお願いします。

このたびユネスコの無形文化遺産に登録された近畿地方、つまり関西地方の風流踊は、全部で8件です。近畿2府5県のうち、1府4県のもので、「①勝手神社の神事踊」「②近江湖南のサンヤレ踊り」「③近江のケンケト祭り」「④京都の六斎念仏ろくさい」「⑤やすらい花」「⑥久多の花笠踊くた」「⑦阿方の風流大踊小踊あま」、そして奈良県では「⑧十津川の大踊おおどり」がユネスコ無形文化遺産に登録されました（数字はp.38の一覧表と対応）。ほかの地域もそうですが、関西でもユネスコの登録になった風流踊は伝承されているもののうちのほんの一部です。

関西地方の風流踊を分類すると、大きく2つに分けることができます。ひとつは、狭義の「風流踊」あるいは「風流太鼓踊」「小歌踊」と呼ばれるもの。もうひとつは「風流囃子（拍子）物」です。一番数が多いのが、前者の「風流太鼓踊」、つまり狭義の「風流踊」です。中世末期の流行歌である「小歌」の歌詞を同一テーマの数番の組歌にして採用し、太鼓を打つ男性の踊り手が中心になった、戦国時代に京都から始まった狭義の風流踊です。これに対して後者の「風流囃子物」は、戦国期に「小歌」を取り入れる以前の形態で、疫病などを村外に出すために囃したりするもので、例えば山車などに付随する囃子物が代表的です。前者の狭義の「風流踊」に関しては、現在では奈良や滋賀、京都では「太鼓踊」、京都では「花踊」、三重などでは「カンコ踊」、兵庫では「ざんざか踊」等の名前で伝わっています。

### 1. 近畿各地の風流踊 一国・府県文化財を例に一

**三重県の風流踊** 三重県の風流踊ですが、国あるいは県の文化財の指定になったものが10件あります。ユネスコ無形文化遺産には国指定が登録されたので、「勝手神社の神事踊」が登録になっています。それ以外にも、三重県は風流太鼓踊が非常にたくさん残っているところで、主にカンコ踊り、カッコ踊りと呼ばれています。伊勢・志摩地方には大念仏と言われる囃子物もあるのですが、三重県にはたくさんの風流太鼓踊が残っています。これは「勝手神社の神事踊」で、今日のシンポジウムチラシのイラストの元になったものかと思っています（図2）。元は疫神を村の外に出すとか、あるいは雨乞いの返礼を目的とした風流踊です。今は10月の秋祭りで演じられていますが、鞆鼓かっこ・腹太鼓とも呼ぶ締太鼓しめだいこを胸の前につけて、これを両手で叩きながら踊る。それから、花笠・花傘のような指物を背中に背負っている、こういうところが特徴になります。



図1 近畿地方の風流踊  
（数字は文末の一覧表と対応）



図2 勝手神社の神事踊  
(全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供)



図3 近江湖南のサンヤレ踊り  
(全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供)



図4 近江のケンケト祭り長刀振り  
(全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供)



図5 京都の六斎念仏  
(全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供)

## 滋賀県の風流踊

三重県と並んで、関西で風流踊がたくさん残っているのが滋賀県で、地元では太鼓踊と呼ばれることが多いです。数え方にもよりますが、今でも24件ほど伝えられています。そのうち、今回ユネスコ無形文化遺産になった2件—サンヤレ踊りとケンケト祭り—は、「小歌」のつかない囃子物です。元々、滋賀県では200ヶ所以上、太鼓踊の伝承地があったと言われてます。特に湖北地方が多いのですが、現在でもこれだけ文化財指定になっているものがあるということです。

図3はサンヤレ踊りです。疫神・疫病を払うための風流囃子物で、滋賀県南部などを中心に春祭りで行われるものです。このように着飾った子どもたちが、太鼓や鞆鼓、それからササラなどの執りものを持って、「サンヤレ、サンヤレ」と囃します。図4は滋賀県のケンケト祭りです。これも疫神払いの風流囃子物になります。

## 京都府の風流踊

次に京都府の風流踊で、国や府の文化財になっているものが14件あります。この度ユネスコ無形文化遺産の登録になったのは、国指定の3件です。風流踊は京都を中心に広まったもので、北部の丹後地方には風流囃子物、それから南部の山城地方には風流太鼓踊が伝わっています。図5は、ユネスコ無形文化遺産になった「京都の六斎念仏」です。六斎念仏とは「南無阿弥陀仏」にメロディーをつけて唱えるものですが、京都ではそれに以外に獅子舞など、いろいろなものが入って芸能化したもので、いわゆる「風流化」した六斎念仏です。これは風流囃子物や風流太鼓踊（小歌踊）よりも更に広義の「風流」で説明されます。それから同じ京都市の「やすらい花」です（図6）。これは平安時代に始まるとされる、風流囃子物になります。図7は「久多の花笠踊」です。美しい造花で飾った灯籠のつくりものを手に持って、ゆったりと小歌で踊る踊りです。今は計7曲が伝えられていますが、詞章は130番ほどが残されています。



### 兵庫県の風流踊

兵庫県にもたくさんの風流踊が伝承されています。今回は国指定の淡路の「阿万の風流大踊小踊」がユネスコの登録になりましたが（図8）、文化財指定だけでも10件あり、北部を中心にざんざか踊、ざんざこ踊、あるいはひゃっこく百石踊などと呼ばれる風流踊（風流太鼓踊）が伝えられています。兵庫も滋賀、三重、奈良などと同じように、雨乞い返礼、つまり願掛けが叶って雨が降ったことのお礼に集落をあげて氏神に奉納する踊りがたくさん伝えられています。「阿万の風流大踊小踊」も、元々は雨乞い返礼のために踊られていたとされています。

### 大阪府・和歌山県の風流踊

大阪府と和歌山県にはユネスコ無形文化遺産はないのですが、こちらにも風流踊が伝えられています。大阪も和歌山も、基本的にはやはり雨乞いの返礼のための踊りが伝わっています。ただし和歌山県の南部、熊野地方になると、盆踊の踊りがあります。一覧表で言うと、田辺市の「大瀬の太鼓踊」です。これが盆踊で踊られる風流踊になります。このあたりは、後で少しお話しさせていただく奈良県の「十津川の大踊」と連なるものです。

### 奈良県の風流踊

最後に奈良県の風流踊は6件あり、北部では雨乞い、南部では盆踊などで踊られます。図9は奈良県の地図ですが、県南部の山間地である吉野地方では盆踊や正月行事で踊られています。

室町末期、風流踊は主に盆に踊られていたのですが、江戸時代には奈良盆地で農民の間にナモデ踊という雨乞いの踊りが大流行します。現在、ナモデ踊は残っていないのですが、このように絵馬の中にたくさん描かれて残っています（図10-12）。奈良県ではこうした絵馬が20枚ほど残されていて、こういうふう到天狗面や鬼面をつけた棒振りや、指物を背負ったカンコ（鞆鼓）の踊り手、それから頭に花笠をかぶった紙垂振りというものが描かれています。このように同じような絵馬が奉納されています。これは祈願が成就して雨が降った時に、そのお礼として村を挙げて踊りを踊った記念に氏神に奉納したものです。衣装や隊列、楽器等、今も関西に残っている風流踊と非常に似ています。踊り子も唐子衣装で、いわばコスプレをして踊っているということです。

現在残っている風流踊（風流太鼓踊）としては「おおやぎゅう大柳生の太鼓踊り」、これは宮座の行事の一環で8



図6 今宮やすらい花  
（全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供）



図7 久多の花笠踊  
（全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供）



図8 阿万の風流大踊小踊  
（全国民俗芸能「風流」保存・振興連合会提供）





図9

県北部（奈良市東部山間）…宮座行事や雨乞返礼  
 口吉野（吉野川流域）…雨乞返礼。江戸時代に奈良盆地で  
 流行したナモデ踊りという雨乞返礼の  
 踊りの影響が残る  
 奥吉野（十津川流域）…正月の神事初めや盆踊り

### 奈良の風流踊の歴史とナモデ踊り

室町末期には、南都（奈良市周辺）では主に盆に風流踊が踊られたが、近世初期以降は農村の雨乞いで踊られることが一般的になってくる。  
 奈良盆地では、念仏囃子物系と考えられるナモデ踊りが発生し、幕末まで、雨乞いの太鼓踊りとして爆発的に流行した。確認できるだけでも 30 カ所以上。  
 しかし、県内のナモデ踊りは明治初頭に衰退した。今は、県内各地の神社に奉納された絵馬などが残る。



図 10 高市郡高取町下子島小島神社蔵 宝暦 2 年 (1752) / 部分：左から露払い役の棒振り（天狗面）、花笠のシデ振り・法螺貝・采配



図 11 高市郡高取町下子島小島神社蔵 文政 4 年 (1821) / 部分：左からシャグマ（赤熊）・唐子衣装の太鼓打ち、花笠のシデ振り

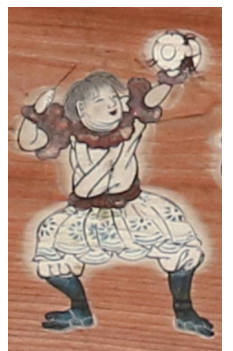


図 12 磯城郡川西町結崎系井神社蔵 天保 13 年 (1842) / 部分：左から御幣を指し物にした唐子衣装のカンコ（鞆鼓）役、締太鼓を振り上げる早馬、笠をかぶり陣羽織姿のシデ振り



月に踊られるものです（図13）。シナイと呼ぶ花を背中につけて、胸に太鼓を吊るして、叩きながら踊るといいます。それから「吐山<sup>はやま</sup>の太鼓踊り」や「丹生<sup>にう</sup>の太鼓踊り」があります（図14・15）。「丹生の太鼓踊り」は吉野川筋の南部の口吉野の方で、そこに伝わる太鼓踊です。それからこれは「国栖<sup>くす</sup>の太鼓踊り」と呼ばれているものです（図16）。これも頭にシヤグマをかぶって太鼓を打ちます。この近くには、指定にはなっていませんが、「東川<sup>うのかわ</sup>の太鼓踊り」という、同じく子どもの柄付き太鼓が出る踊りもあります。

## 2. 十津川の大踊

最後に「十津川の大踊<sup>おおおどり</sup>」を紹介します。先ほどの雨乞いと違って、こちらは元は先祖供養から発生した盆踊の一部として伝えられているものです。盆踊で踊られる演目は、大体ひとつの集落で20曲以上もあるのですが、その中に大踊というものがあります（図17-19）。小原、武蔵、西川の3ヶ所で伝えられています（近年、湯之原でも復活）。盆踊りには、口説や民謡の踊りなど、いろんな踊りがありますが、その中で大踊＝風流踊は、大体1曲か2曲伝わっている感じです。今は10ヶ所で盆踊りが踊られています。昔は55の集落がありましたので、55全てで行われていたのですが、今は10集落です。こうしてバケという仮装が出たり（図20）、切子灯籠のつくりものが出たり（図21）、大踊の時は、こういうところが特徴になります。

もうひとつ、十津川村の北の上流域の五條市大塔町に「篠原おどり」という踊りがあります（図22）。これは「典型的な」風流踊に分類されるものです。ただ見た目が非常に地味だというのは写真からもわかると思います。今まで見ていただいたものと比べて、見た目の、装いの部分での「風流」が見られない。ですが、芸態、歌詞や音楽構造などを比較してみると、例えば十津川と同じ「いりは」という入場曲では、歌詞が小歌、それからその間に歌のない囃子が入って、また次に歌があって囃子がある



図13 大柳生の太鼓踊り（奈良市／野本暉房氏撮影）



図14 吐山の太鼓踊り（奈良市／野本暉房氏撮影）



図15 丹生の太鼓踊り（吉野郡下市町）



図16 国栖の太鼓踊り  
（吉野郡吉野町／野本暉房氏撮影）





図 17 十津川の大踊 (十津川村小原/野本暉房氏撮影)



図 18 十津川の大踊 (十津川村武蔵/野本暉房氏撮影)



図 19 十津川の大踊「いりは」(十津川村西川)



図 20 大踊のバケ (十津川村小原/野本暉房氏撮影)



図 21 大踊の切り子燈籠 (十津川村小原/野本暉房氏撮影)



図 22 篠原おどり (五條市)



図 24 篠原おどり伝承者公募説明会 (平成 26 年)

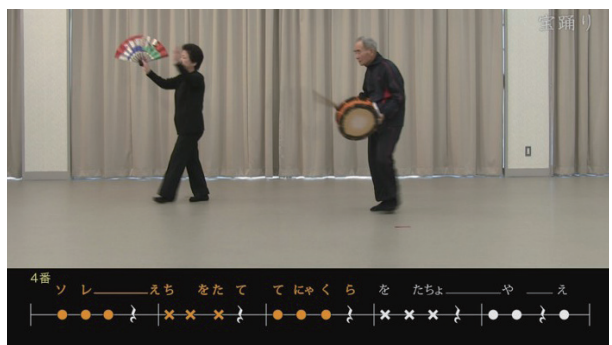


図 25 教則映像 (篠原おどり)

という数番の組歌の繰り返しの構造を持っています(図23)。実は吉野地方といっても十津川と大塔はかなり離れていますので、どういうふうに影響があり、伝わったのかは、よくわからないのですが、メロディーも非常に似ています。

図23 十津川と大塔の「いりは踊」

■ 「いりは踊」(十津川村西川)

【ハヤシ】 ハーエーンヨウ

【歌謡部】 踊が参る どれから参る 加賀越前の京から参る

【間奏部・ハヤシ】 ハーエーンーヨーエーエソ ソーリャ エーン エーン エーイヨーエーソウレーエー

【歌謡部】 お船に召したはいろなみそろい 下には銭つみ中黄金 上には白金おつみある

【間奏部・ハヤシ】 ハーエーンーヨーエーエソ ソーリャ エーン エーン エーイヨーエーソウレーエー

■ 「いりは踊」(五條市大塔町篠原)

【ハヤシ】 ハア●●● ヤア●●●

【歌謡部】 踊が参るよ どれから参る 加賀越前の京からに

【間奏部・ハヤシ】 ハイヨ エイエイ エエイ エエイヨヤヤイ ●●●

サア●● ハイ●●● ヤイ●●● ●●● サア●● ハイ●●● ヤイ●●● ●●●

【歌謡部】 浮舟に積みたは 何々候よ 下には白金 中には黄金 綾や錦を帆にかけて

【間奏部・ハヤシ】 ハイヨ エイエイ エエイ エエイヨヤ

サア●● ハイ●●● ヤイ●●● ●●● サア●● ハイ●●● ヤイ●●● ●●●

### 3. 関西地方の風流踊の特徴と現在

関西地方の風流踊の特徴としては、盆踊や雨乞い、つくりもの、いろいろあるのですが、音楽的には、歌の部分と間奏部分(囃子)が繰り返し演奏される、そういう形式の共通性があります。簡条書きでまとめてみると次のようになります(青盛透氏の整理による)。

- ① 盆踊、雨乞い、疫神送りなどで踊られる。
- ② 人形や造花で飾った花笠、切籠燈籠など、美しい「つくりもの」をともなう。
- ③ 締め太鼓をもつ踊り子(男性)が主役で、太鼓のリズムの打ちわけや隊列変化を見せ場とする
- ④ 太太鼓を据え置き、これを回り打つ踊り子のつく様式がある。
- ⑤ 行列の踊りと、踊り場での輪踊りがあり、後者が踊りの中心である。
- ⑥ 法螺貝や笛、鉦などが加わることもある。
- ⑦ 太鼓を持つ踊り子の周りに、多数の団扇、扇、シデ、采配などを手に持って踊るものがある。
- ⑧ 踊り名のテーマに応じて「小歌」が集められ、数節(数番)の組歌としたものが多い。
- ⑨ 緩やかな歌謡部と太鼓の早いリズムが主体の間奏部(囃子)の踊りが交互に繰り返して進行する。

最後に最近の伝承について。どこも過疎で伝承者がいなくなっているのですが、「篠原おどり」ではこのように一般に踊り手を公募をして踊りを復活させたり(図24)、あるいは教則ビデオを作ったりしています(図25)。篠原だけでなく、吐山、丹生、十津川でも教則ビデオを作りましたが、こういうことをして今、伝承者を増やせないかと考えています。あるいは大阪や奈良の大学で講習会を開いて、外の都会の若者にゆくゆくは伝承者として参加していただけるよう考えているところです。YouTubeで映像も見られますので(奈良県無形文化遺産アーカイブ)、また御覧いただけたらと思います。





■ 当日配布資料：近畿2府5県の「風流踊」「風流拍子物」無形民俗文化財一覧（国指定・県指定等） ★がユネスコ登録

名 称	所在地	指定種別	開催日
-----	-----	------	-----

三重県

★ 勝手神社の神事踊	伊賀市	ユネスコ登録/国指定/県指定/ 国選択	10月第2日曜	(21)
佐八の羯鼓踊	伊勢市	県指定	8月15・16日	
円座の羯鼓踊	伊勢市	県指定	8月14日	
本郷の羯鼓踊	松阪市	県指定	8月14日（4年毎）	
香良洲町の宮踊	津市	県指定	8月13・15日	
かんこ踊	松阪市	県指定	8月13～15日、1月14日	
ささら踊り	志摩市	県指定	8月14・15日（5年毎）	
陽夫多神社祇園祭の願之山行事	伊賀市	県指定	7月31日	
加太のかんこ踊り	亀山市	県指定	8月14・15日	

滋賀県

★ 近江湖南のサンヤレ踊り	草津市、栗東市	ユネスコ登録/国指定/国選択/ 県選択	5月3日、5月5日	(22)
★ 近江のケンケト祭り長刀振り	守山市、甲賀市、 東近江市、竜王町	ユネスコ登録/国指定/国選択/ 県選択	5月3日、5日	(23)
中河内の太鼓踊 附奴振	長浜市	県指定/県選択	不定期	
土山の太鼓踊り	甲賀市	県指定/県選択	4月第3日曜、7月第2日曜	
油日の太鼓踊	甲賀市	国選択	5月1日（不定期）	
朝日豊年太鼓踊	米原市	国選択/県選択	10月第2日曜	
おはな踊	犬上郡甲良町	国選択/県選択	8月21日	
延勝寺の太鼓踊り	長浜市	県選択	8月15日（不定期）	
八日市の太鼓踊	長浜市	県選択	不定期	
金居原の太鼓踊り	長浜市	県選択	4月13日（不定期）	
川合の太鼓踊り	長浜市	県選択	8月18日（不定期）	
下余呉の太鼓踊り	長浜市	県選択	8月中旬（不定期）	
渋川の花踊り	草津市	県選択	9月13日	
古高の鼓踊	守山市	県選択	8月末頃（不定期）	
御園太鼓踊	栗東市	県選択	不定期	
上砥山の太鼓踊	栗東市	県選択	9月第1土曜	
青土の太鼓踊り	甲賀市	県選択	10月8日に近い日曜	
（牧の）太鼓踊	甲賀市	県選択	9月第1土曜	
川上祭りのサンヤレ	高島市	県選択	4月18日	
大野木豊年太鼓踊	米原市	県選択	10月第2日曜	
顕教おどり	米原市	県選択	8月15日（不定期）	
（春照の）太鼓踊 附奴振	米原市	県選択	9月23日（不定期）	
伊吹山奉納太鼓踊	米原市	県選択	10月第1日曜（不定期）	

京都府

★ 京都の六斎念仏	京都市	ユネスコ登録/国指定/国選択	8月ほか	(24)
★ やすらい花	京都市	ユネスコ登録/国指定/国選択	4月第2日曜日ほか	(25)
★ 久多の花笠踊	京都市	ユネスコ登録/国指定/国選択	8月24日	(26)



名 称	所在地	指定種別	開催日
田原のカッコスリ	南丹市	国選択	10月15日以前の日曜
田山花踊	相楽郡南山城村	府指定	11月3日
黒部の踊子	京丹後市	府指定	10月第2日曜
舟木の踊子	京丹後市	府指定	10月第2日曜
多保市の笹ばやし	福知山市	府指定	8月16日
出雲風流花踊	亀岡市	府登録	4月18日
上粕の精霊踊	木津川市	府登録	8月14日
周木の三番叟、笹ばやし、神楽	京丹後市	府登録	10月上旬
木積神社祭の神楽・太刀振・笹ばやし	与謝郡与謝野町	府登録	4月30日、5月1日
竹野のテンキテンキ	京丹後市	府登録	10月上旬
蒲江の振物・踊り太鼓	舞鶴市	府登録	10月上旬
大島の神楽・太刀振・踊	宮津市	府登録	10月中旬
新井の太刀振・花踊	与謝郡伊根町	府登録	4月第2日曜
大山の刀踊	京丹後市	府登録	10月上旬

### 兵庫県

★ 阿万の風流大踊小踊	南あわじ市	ユネスコ登録/国指定/国選択	9月15日に近い日曜	⑳
大杉ざんざこ踊	養父市	県指定/国選択	8月16日	
久谷ざんざか踊	美方郡新温泉町	県指定	9月15日	
八鹿町九鹿ざんざか踊り	養父市八鹿町	県指定	10月15日に近い日曜	
寺内ざんざか踊	朝来市	県指定	7月第3日曜	
秋津百石踊	加東市	県指定	不定期	
三田本庄百石踊	三田市	県指定	11月23日	
大屋町若杉ざんざか踊	養父市	県指定	8月16日	
轟の太鼓踊	豊岡市竹野町	県指定	8月14日	
府中八幡神社のささら踊り	南あわじ市	県指定	9月第1土曜	

### 奈良県

★ 十津川の大踊	吉野郡十津川村	ユネスコ登録/国指定/国選択	8月13～15日	㉑
篠原おどり	五條市	県指定/国選択	1月第3日曜（1月25日）	
大柳生の太鼓踊り	奈良市	県指定	8月17日	
吐山の太鼓踊り	奈良市	県指定	11月23日（元は不定期）	
国栖の太鼓踊り	吉野郡吉野町	県指定	不定期	
丹生の太鼓踊り	吉野郡下市町	県指定	不定期	

### 大阪府

上神谷のこおどり	堺市	府指定/国選択	10月第1日曜
葛城踊り	岸和田市	府指定	8月14日

### 和歌山県

戯瓢踊	御坊市	県指定/国選択	10月4・5日
大瀬の太鼓踊	田辺市	県指定/国選択	8月15日
嵯峨谷の神踊り	橋本市	県指定	8月15日
立神の雨乞踊り	海南市	県指定	不定期
大窪の笠踊り	海南市	県指定	7月中旬
一ノ瀬大踊	西牟婁郡上富田町	県指定	不定期



## クロストーク

## 久保田裕道×川崎瑞穂×俵木悟×森本仙介

**久保田裕道** 進行を務めます久保田です。よろしくお願いいたします。

今回のテーマは風流踊をどうやって楽しむか、その楽しみ方ですが、まず私がお話ししました歴史的な部分も含めて、風流踊には長い歴史、そしていろいろな種類があるということぐらいはおわかりいただけたかと思います。まずは今話したばかりの森本さんに伺ってみたいと思います。こちらの3人は東日本に住んでいますが、我々からすると、西の方の風流踊というのはかなりイメージが違うなという感じで、歴史的な部分を背負っているんだなということを思うのですが、そのあたり、西でたくさんご覧になっていかがでしょうか。

**森本仙介** 西日本についてというより関西に絞ってということになりますが、先ほどもちょっと話しましたが、狭い意味での風流踊（風流太鼓踊）、さらに古い形式の風流囃子物というものが中心になっています。それだけ古い元の形（典型）が残っているということかもしれないです。一方で、あまり創作性はないという語弊はあるかもしれませんが、先ほど、雨乞いの返礼で踊ったとお話ししましたが、雨乞いの返礼というのは、例えば20～30年に1回踊るだけなんですね。氏神への願掛けとしては最後のカード。ですので、30年前に踊った老人から習って、それを30年後にまた踊る、そういうふうに伝えられてきたものも多い。それから村全体、あるいは複数の村で——郷<sup>ごう</sup>というのですが——集まって練習をして、シャグマや唐子衣装、花笠などの用具も揃えて用意し、村落組織で執行する一大行事ですから、なかなか変化のしようがない。ですので、風流踊が固定した、形式的なものになる。古文書や歌詞、絵馬などもたくさん残っているので、そういう歴史資料と照らし合わせると、古いだらうという形のものが残っているのだらうと思います。

**久保田** ありがとうございます。やはり、そのものが古い感じがしますよね。私が拝見したものでも、みなさんが袴を着ていたり、警備の人まで制服を着ていて、しっかりしていると感じました。





俵木さんはいかがでしょう、先ほど九州の事例も出てきましたけれど、そのあたりの歴史的な部分は。

**俵木 悟** そうですね、私は与えられたテーマが装いということだったので、どちらかという、いろいろな工夫をして、違うものや新しいものを作っていくことを強調しました。創作的で新しいものを生み出していく過程のなかで、時代に合わせて踊りがどんどん変わっていくのですが、それと同時に、例えばひとつの地域に同じ太鼓踊が伝わっていたとしても、こっこの村でやっている太鼓踊と隣の村でやっている太鼓踊が、共通するところもありながらも、何か明らかな特徴がある。例えばさっきも鹿児島県の太鼓踊をお見せしましたが、鹿児島は村ごとに太鼓踊があるぐらい数が多いのですが、例えば同じ神社の祭りに出る複数の村で、背負うものの形が全然違う村もあれば、一方はあまり装飾的にはならない代わりに歌が非常に豊かになっていく村があったり、複数のものを比較してみると、力の入れ具合によってこれは一方ではこういうふうに変化していて、また別のものはまた別の方向性で新しい工夫をしていったのかなみたいなことがわかります。そういうふうに、ちょっと目を広げて比較してみると、風流の創作性みたいなものがまた見えてくるところがあるのではないかと感じています。

**久保田** 太鼓踊も東日本では三匹獅子舞というか、獅子舞的な太鼓踊に変わっていきますね。今度は音楽面から見て、歴史なども含めて川崎さんはいかがでしょう。いろいろなバリエーションがあるかと思うのですが、そのあたりを楽しんでみるという意味でも、音楽のこういうところがわかるとよい、そういうお話をいただきましたけれども、あらためて何かありましたら。

**川崎 瑞穂** では少し補足的なところで、今回は扱わなかったところだと、旋律（メロディー）とリズムです。リズムにも共通点があることが知られておりまして、例えば先ほどから出てきている囃子物には、共通するリズムがあると言われていています。ちょっと打ってみますと、「♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪」(トントト トントト トントト トン)という、こういったリズムはよく使われるということ、樋口昭さんという、この分野でずっと研究されてきた方がおっしゃっています(樋口昭 2010「羯鼓稚児舞・獅子舞・しゃぎりにみる旋律および拍節構造」植木行宣・田井竜一編『祇園囃子の源流—風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリー』岩田書院 p.99の譜例1を簡略化して表記)。それ以外にメロディにも共通点がありますね。例えば今話に出た三匹獅子舞ですと、ほとんどの事例で使われているのが《岡崎》という曲です。《岡崎女郎衆》という近世初期の流行り歌に由来するとされますが、そういったメロディーがいろいろなところで使われている。ところが、今、俵木先生がおっしゃったように、よく聴いてみるとそれぞれの地域でリズムや音程等が変わってきます。ですので、ちょっとマニアックな話になりますが、そういったものを比較してみると、どこがどの地域に似ているかな、違うかなとか、そんなことがわかったりするので、まさに俵木先生がおっしゃったことは音楽にも当てはまるのではないかと思います。

あと1点、補足なのですが、先ほど西馬音内盆踊の実演の時に音節を数えてみてくださいとお話ししました。西馬音内盆踊の場合にはもうひとつ、とても大事な歌詞がありまして、「音頭」というのですが、そちらでは889 889という形で歌っていきます。ですから、西馬音内盆踊にはいろいろな歌の種類があるわけです。音とその音節の数が違うとどうイメージが変わるのか、そういうところも聴いてみるといいのではないかと思います。

**久保田** ありがとうございます。いろいろな楽しみ方がありますけれども、これまで話してきていなかったことで、今おっしゃっていただいた踊り方というのがあります。これは映像をみていただいた後、実際に西馬音内盆踊の踊り方に注目して、会場みなさんにもぜひ踊っていただこうかと思っておりますので、ご期待ください。そういう話をしてるうちにもう半分過ぎてしましまして、次にお

話を聞いたら終わりになるかと思います。

これからは、今まで歴史的な部分などをお話いただきましたけれども、実は風流踊にはいろいろなバリエーションがあって、そして現在いろいろな変化も遂げてきている。今現在の風流踊とは何か、それはどう楽しんだらいいのか、あるいは皆さんどう楽しんでいるのかということをお聞きしていきたいと思います。今度は逆に川崎さんから、最近の盆踊なども含めてお話いただければと思います。

**川崎** 先ほどからコスプレの話が出てきていますが、民俗芸能というものは、事例にもよりますが、やはり人々が生活の中で受け継いできたものがたくさんあるんですね。そうすると、その時代時代の人々の好みや、《岡崎女郎衆》のように、当時の人々が流行として享受していたものが残っていたりするんですね。ですので、現代でも様々な流行歌があったりしますが、そういったものも、様々な人が聴いたりあるいはライブに参加したりして、楽しんでいますね。ですから民俗芸能や伝統芸能と聞くと、どうしても難しそうというイメージもあると思うのですが、一方でそういったものを本当に楽しんでやってきた人がたくさんいたということです。ではどういったところに人々は楽しみを見出していたのだろうか、そして今はどのように楽しまれているのだろうか。こういった観点で見るといいのではないかと思います。つまり私達が現在、楽しんでいるいろいろなコンテンツやライブなどと同じようなレベルで、人々はどうやって芸能を楽しんでいたのか、そういった形で比較してみると、いろいろわかってくることも多いのではないかと私は思います。

**俵木** いろいろお話ししたいことはあるのですが、今回の私のテーマに関連させてひとつ、先ほど潮来市徳島の女性たちが綺麗な着物を着て踊っている姿をお見せしましたけれども、あの時に、なんで自分たちが踊りを一生懸命練習してやるのかというと、結局それがあるから綺麗な着物を作ってみなで集まって、お茶を飲みながら練習して踊りができる。正直に言うと、あの踊りは文化財にも指定されておらず、おそらく踊りの、何て言うのでしょうか、歴史的な価値という点で見ると、そんなに高く評価されるものではないかもしれない。けれども、ではなぜ地域の人たちが続けてきたかということですね。それは、踊りをひとつのきっかけにしてみんなが集まって、話をして、しかも綺麗な着物を着られる。あの着物はお祭りの当番が来た時、5年に1回くらいしか着てないんですね。じゃあ次の時にはそれでまた出ればいいと思うのですが、それでは面白くないでしょ、というわけです。言ってみればそれを口実にして新しい着物を作りたい。それが踊りを続けてきたひとつの動機になっていると思うんですね。そういうふうに、常にウキウキわくわくするような、新しいものを取り入れたり、今度はこういうふうにしてみようみたいなことが、こういう風流というものを続けていく動機のひとつになっているのかなというのが、自分の調査の経験の中で強く感じたことです。

**久保田** 最後に森本さん、西の方は古いものを守っているというイメージがありますが、新しいものも含めて教えていただければと思います。

**森本** そうですね、「文化財保存」「文化財保護」という文化財行政の仕事柄、古いものを残すということが業務であり、あるいはそういうものが指定にはなっているのですが、先ほどからありましたように、雨乞いというのは今はもう全然しないわけですね。もうその必要もないですから。そうすると、その地域でやっている風流踊は、もう別の意味、現代的な意義を見つけていかなければならないということがあります。さっき例を出しましたが、地元の小学校などの郷土学習の中で教えたり、大阪などの都市部で講習会をやって、実際の盆踊の時には、この講習会で習った都市の若者が半分くらいは占めているということがあったりします。踊り自体はたしかに古い、変わっていないかもしれないですが、公民館のサークル活動みたいになってきて、大阪や和歌山の方も参加しながら、今、保

存会を作っている。ということで、それぞれ楽しみ方は違うかと思うのですが、普段は体験できないものが体験できるということで、そういうふうに変まっているのかなど。昔は村から出してはいけなとか、村の人しか、男性しか参加できないということがあったのですが、今はそれも変わってきていますし、そうしないと残っていかないだろうと思います。

**久保田** ありがとうございます。やはりそれぞれの地域で、いろいろ工夫をして伝承を守っていくということだけではなくて、それぞれの地域でやっている人たちが楽しんで続けていけることが必要ですね。いま小学校の取り組みの紹介がありましたが、今日会場にもいらっしゃっています、綾子踊を伝える香川県まんのう町では、頭にかぶる花笠のペーパークラフトをお作りになって、これを小学校で学習のために使うという試みを始められたと聞きました。そういう試みも重要なんだと、それぞれの地域でいろいろな形で取り組みをやっているんだということを感じます。また地域のやっている人たちだけではなくて、やはりここに来ているみなさま方に興味を持って見に行ってください。これも重要な風流踊のこれからの継承の底上げ、そういう力になっていくのではないかと思います。とは言え、森本さん、「十津川の盆踊」はめちゃめちゃ遠くてなかなか見に行けなくて。それが東京で見られたらいいなと思うのですが、そういう機会はないですか。

**森本** 今年（2023年）11月の日本青年館の「全国民俗芸能大会」に「十津川の大踊」が出演します。昼だけでなく、夜の部の2時間にも出演します。ぜひ来ていただけたらと思います。十津川も調整が大変で、最初は遠いし行きたくないという話だったんですが（笑）、だんだんのってきて、今はみんな行くという話になっています。また11月19日・日曜日の京都の「近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会」でも「十津川の大踊」が出演します。

**久保田** 東京は2023年11月25日土曜日ですね。今申し上げました、香川県の綾子踊も出演しますので、よろしければ。あとはもうひとつ紹介された奈良県の篠原おどりが見たいなと思ったら…。

**森本** 全日本郷土芸能協会の「日本の郷土芸能大祭」に出演する予定です。

**久保田** こちらは2023年9月の2日・3日で、3日に篠原おどりがあります。これは明治神宮でありますので、今申し込みが始まっております。東京でそういった風流踊が見られる機会はなかなかないので、ぜひ足を運んでいただければと思います。それから、これから夏に向かって風流踊の季節になってまいりますので、またぜひ現地に、観光がてらで結構ですので、見にいっていただければと思います。

非常に駆け足になってしまいましたけれども、以上でクロストークを終わりたいと思います。ありがとうございました。



## 実演・解説

### 佐藤幾子（西馬音内盆踊保存会）×久保田裕道

**久保田裕道** これから実演をご覧くださいませけれども、その前に少しお話を聞いてみたいと思います。まず西馬音内盆踊保存会の佐藤幾子さんにお話を伺いたいと思います。幾子さんがこの踊りを始めたのはおいくつぐらいの時でしょうか。

**佐藤幾子** 物心ついた時には踊りの輪の中に入っていました。最初は子どもの踊りなんですけれども、先輩のみなさんが踊っている「ドドンナ」といったら「ドンナ」と、向かい側の人が見ながら覚えています。そして盆踊が始まる頃になると、鼻の上に白い化粧をしてもらって踊りに行くのがとっても楽しみでした。現在は本番が近づくとこども園で毎週練習しておりますし、小学校・中学校では総合学習といって、西馬音内盆踊を体験していますので、ほとんどの子どもたちは、大体の踊りを覚えていると思います。

**久保田** そしていま着ていただいているのが「端縫い」の衣装ということになりますね。

**佐藤** この衣装はほとんど絹の生地できているものです。昔は縮緬ちりめんでして、いま着ているものは綿が入っていないんですけれど、古いものは薄い綿が入っていました。とっても軽くて、綿が入っていても夏でも風通しがよく、踊りやすいんですね。そしてこの端縫いの衣装は旧家でなければなかったんですね。また、端縫いの衣装は踊りが上手にならないと着られないということがありました。今から30年くらい前までは、ほとんど藍染衣装で踊っている人が多かったですね。かがり火の踊りの輪の中に入ると、藍染の並んでいる中に端縫い衣装の踊り手がちょこちょこいるという感じでしたね。

**久保田** 端縫いはベテランの証しということですね。そしてお隣の和賀靖子さんの着ておられる衣装が「藍染」の衣装ということですね。

**佐藤** 藍染の衣装は、昔は各々の家で染めたり、染屋さんで染めてもらっていました。その家々の独特な染め方があったようです。今は藍染をする染屋さんも少なくなったようです。藍染には笠もかぶりますが、彦三頭巾ひこさづきんというのもかぶるんです。顔を隠して踊るので、昔は地主や使用人などの身分の区別なく、みんなで一緒に楽しんで踊りましょうという意味もあり、藍染衣装を貸したりして、彦三頭巾で踊ったと聞いています。

**久保田** では、これから実演を見ていただいて、その後みなさまにぜひ加わっていただいて、少しでも踊りを体験していただきたいと思っていますのですが、まず踊りが2種類あるんですね。「音頭おんど」と「がんげ」があるということです。それぞれどういう動きをしているのか、これを頭に入れてご覧いただくと踊りの雰囲気わかるのではないかと。これがまったくわからないで見ていると、どこが切れ目で、どう続



端縫いの衣装（中央）と藍染の衣装（右）

いているのか全然わからないと思いますので、どこまでが一連の動きなのかということ、まずちょっとここでやっていただきたいと思います。それを頭に入れて、これからの実演をご覧いただきたいと思います。まず「音頭」のほうからお願いします。

**佐藤** 私が小さい頃はCDやDVD等はありませんでしたので、<sup>くちびょうし</sup>口拍子というもので踊りを練習していました。ちょっと「音頭」の口拍子をやってみたいと思います。

「ドドンナ ドンナ、ドーンドッコイナ、オイトコドッコイ ドッコイナ、オイトコドッコイナ、  
ヨイヨイヨイナデ オイトコドッコイナ」

**久保田** これは本来1番と2番があるということなんですね。

**佐藤** そうですね。

**久保田** それで、いまのを繰り返して踊っていく。2番は若干違うんですけども、今日みなさんに体験いただくのが1番の方なので、今の動きを繰り返します。もう覚えましたね(笑)。特にポイントは足、つい手に目がいってしまうんですけども、基本は足が重要です。足の動き、そしてそれに続いていく手を見ていただければと思います。

今のは「音頭」です。音頭は簡単なほうですよ。もうひとつは「がんけ」という、これも非常に美しい踊りですけども、そちらの方も一通り踊っていただけますでしょうか。

**佐藤** ではガンケも口拍子でいきたいと思います。

「トントントーン カンカンカン、トーントーン カンカンカン、トントントーン カンカンカン、  
ヒーフーミーヨー、くるっとまわってトントントン」

**久保田** ありがとうございます。何か美しく踊るためのポイントはありますか？

**佐藤** そうですね。足の運びと、やはり手の基本的な動作をしっかり踊ってもらいたいと思います。指は揃えてしっかりと伸ばして、親指を中に入れるというのが西馬音内盆踊の特徴になりますからね。

**久保田** 最後に、幾子さんにとって西馬音内の盆踊とは、そして盆踊を楽しむためには、どんなことを考えておられるのか、あるいはこれからどういうことをしていきたいのかということがございましたら教えていただきたいです。

**佐藤** そうですね、私も長年盆踊を踊っていますが、この盆踊は踊り方(踊り手)、衣装、それにお囃子と三拍子揃って、踊る方も見る方も、たぶん飽きないのではないか、一緒に楽しめるのかなあと思っております。先輩方がこのような衣装、踊り方と素晴らしいものを残してくれたおかげでユネスコ無形文化遺産に登録されました。このような西馬音内盆踊の伝統を引き継ぎ、踊り方や衣装も華美にならないように、奢らず、地道に素晴らしい宝を守りながら伝承していきたいと思っております。

**久保田** ありがとうございます。











【踊り手】 佐藤 まゆみ  
 黒澤 孝子  
 佐藤 幾子  
 米澤 弘子  
 矢崎 東子  
 和賀 靖子

【お囃子】 高橋 巧 (大太鼓)  
 矢野 嘉章 (小太鼓)  
 和賀 慎治 (地口・鼓)  
 高橋 英樹 (地口・鉦)  
 佐藤 幹翁 (笛)  
 小松 雅俊 (笛)  
 原田 勝 (笛)  
 佐藤 隆昭 (三味線)





## おわりに

いや楽しかったですね。みなさんが踊りの余韻に浸っているところなので、私の話があまり長くないようにしたいと思います。まず何より、西馬音内盆踊保存会のみなさま、本当にありがとうございました。私も踊りを体験させていただいて、目の前に羽後町の安藤町長がいらしたので、町長さんに付いていけば大丈夫だと思ったら、そうでもなかった(笑)。頭でなく身体が覚えていないと難しいものだと実感しました。ここで拝見しても素晴らしいのですが、やはりこれを地元の空気感の中で見てみたいという思いを強くしました。ぜひいつか、現地でみなさんの踊りを拝見できればと思っています。

今日は全国各地で民俗芸能の保存に尽力されている方々にもたくさんお越しいただいていると伺っています。コロナ禍ということで、これまで非常にご苦勞が多かったと思います。プレゼンで全国各地の芸能を見せていただいて、こんなにも多様性があるのかと改めて感じた次第です。また、踊りには疫病退散など様々な意味合いが込められているということだったので、コロナ禍の時にむしろもっと派手にやらなくてははいけなかったのではないかとも思いました。

それはさておき、ようやくコロナも落ち着いて、全国各地で祭りが再開しています。私も毎年行っているお祭りがあるのですが、ようやく去年から再開しまして、そういう状況になって本当によかったなと思っています。こういう各地にある伝統がますます盛んに受け継がれていくことを願っております。

登壇いただいた先生方にもお礼を申し上げます。いろいろとお話を伺った上で実演を拝見すると、そこに込められた意味合いもよくわかるということを実感しました。

最後に宣伝ですが、冒頭で小西理事長からもお話がありましたように、ポーラ伝統文化振興財団より東京文化財研究所に貴重な記録映像をご寄贈いただいております。これまでなかなか拝見する機会がなかった資料ですが、この会場のすぐ隣にある研究所の資料閲覧室で視聴できるようになりました。権利の関係等もあり Web 公開は難しいのですが、東京文化財研究所までご足勞いただければ、どなたでも見ていただくことができます。このような貴重な資料がさらに活用されるよう、その一助となればと思っております。改めて、ポーラ伝統文化振興財団の寛大なご寄贈に御礼を申し上げます。

今日は本当にたくさんの方にご参加いただき、ありがとうございました。最後にもう一度、西馬音内盆踊保存会の方々への盛大な拍手をお願いして、本シンポジウムを終了したいと思います。

東京文化財研究所 副所長 友田正彦  
〔踊れ、魂よ！一風流踊の楽しみ方〕 閉会挨拶より)



公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団 寄贈  
 伝統文化記録映画一覧

	タイトル	尺	制作年
1	「一うるしを現代にいかす― 曲輪造・赤地友哉」	31分	1980年9月
2	「芭蕉布を織る女たち― 連帯の手わざ―」	30分	1981年1月
3	「新野の雪祭り ― 神々と里人たちの宴―」	30分	1981年3月
4	「国東の修正鬼会 ― 鬼さまが訪れる夜―」	30分	1981年4月
5	「― 箆打ちに生きる― 小川善三郎・献上博多織」	33分	1982年5月
6	「鍛金・関谷四郎 ― あしたをはぐくむ―」	30分	1983年3月
7	「呉須三昧 ― 近藤悠三の世界―」	32分	1983年3月
8	「芹沢銈介の美の世界」	35分	1984年5月
9	「狂言師・三宅藤九郎」	32分	1984年12月
10	「― 琵琶湖・長浜― 曳山まつり」	32分	1985年6月
11	「ふるさとからくり風土記 ― 八女福島の燈籠人形―」	31分	1987年11月
12	「月と大綱引き」	33分	1990年5月
13	「秩父の夜祭り ― 山波の音が聞こえる―」	34分	1990年5月
14	「重要無形文化財 輪島塗に生きる」	34分	1990年5月
15	「世阿弥の能」	49分	1991年6月
16	「飛騨 古川祭 一起し太鼓が響く夜―」	35分	1992年9月
17	「舞うがごとく 翔ぶがごとく ― 奥三河の花祭り―」	33分	1992年9月
18	「変幻自在 ― 田口善国・蒔絵の美―」	36分	1993年10月
19	「ねぶた祭り ― 津軽びとの夏―」	34分	1993年12月
20	「みちのくの鬼たち ― 鬼剣舞の里―」	36分	1996年5月
21	「木の生命よみがえる ― 川北良造の木工芸―」	34分	1997年10月
22	「志野に生きる 鈴木藏」	33分	2000年7月
23	「神と生きる ― 日本の祭りを支える頭屋制度―」	30分	2004年6月
24	「鬼来迎 鬼と仏が生きる里」	38分	2014年3月
25	「蒔絵 室瀬和美 ― 時を超える美―」	39分	2017年12月
26	「野村万作から 萬斎、裕基へ」	42分	2022年1月

■ 当日配布資料（一部）

- ▶ 西馬音内盆踊掲載の『伝統と文化』46号  
ポララ伝統文化振興財団 2023年



西馬音盆踊保存会全面協力  
**「西馬音盆踊り」**  
**YouTube動画**  
ぜひ！ぜひ！  
ご覧ください！









日本各地の様々な伝統文化を記録し  
配信しています！詳しくはこちら ➡

公益財団法人  
**ポララ伝統文化振興財団**  
POLA FOUNDATION OF JAPANESE CULTURE



**「西馬音内盆踊の編み笠」編**

西馬音内盆踊を彩る装束として欠かせないのが、「編み笠」です。この編み笠は職人の手によって藁が一筋一筋編み込まれ、繊細な見た目でありながらも型崩れのしにくい、丈夫なつくりになっているのです。真撃に編み笠と向き合う、編み笠職人・阿部アイさんの姿を柔らかな眼差しで記録致しました。



東北映像フェスティバル 優秀賞 受賞動画

「踊れ、魂よ -精霊たちと交わる夜-」  
10:20

秋田県雄勝郡羽後町では、毎年8月16日から18日まで西馬音内本町通りにおいて「西馬音内盆踊り」が行われます。保存会によって演じられる、「魂の踊り」。地域の人々の想いを丁寧に撮影し、皆様にお届けいたします。





## 踊れ、魂よ！ —風流踊の楽しみ方—

令和5年（2023）8月

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部

編集協力 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団

## *Dance, Soul!* — How to Enjoy the *Furyu-odori* Dance —

Published in August, 2023

Edited by the Department of Intangible Cultural Heritage, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties,  
Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Properties

Editorial cooperation: Pola Foundation of Japanese Culture